Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

問題の所在

〝諸教の讃ずるところ、多く弥陀に在り。〟[1]

中国において厖大に訳出された経典の中で浄土思想に言及する経典の非常に多いことは、この言葉を俟つまでも無く、古くから知られていた。そうした中でも浄土思想を中心として構成されている所謂〈浄土三部経〉が、とくに日本において法然、親鸞によって浄土宗、浄土真宗が開宗されて以来、浄土正依の経典として圧倒的支持を有して信奉され、今日に至っていることも周知のことである。インド、中国の浄土教においても〈浄土三部経〉という規定は無かったが[2]、矢張り主要な経典としての位置を占めていたことは誤りでは無い。しかしながら、浄土思想に言及する他の経典の非常に多く存在することは、単に〈浄土三部経〉ばかりでなく、様々な経典の教えによって浄土教を信奉した人々の存在を物語っている。たとえば、中国浄土教の大要を思想的特徴として理解するとき、〈中国浄土三流〉として考えれば非常に好便ではあるけれども、中国ではそのような見方をされていなかったし、往生の行業にしても〈称名念仏〉以外に様々な方法が為されていたことも、すでに指摘されている[3]。このように考えるとき、われわれは中国浄土教の実態を研究する為の基礎的資料の一つとして、まず浄土思想に言及する漢訳経典が如何程あり、どのような教えが浄土教と関係をもって説かれていたかを探らねばならない。もとより、それらの中には単に言及されているというだけに過ぎない経典も多いわけであるが、〈浄土三部経〉以外の如何なる経典を所依としていたか、またそれらに説かれていない中国以降の独自の浄土思想が何であるか等を知る為の最初の段階として浄土教関係漢訳経典を考えねばならないであろう。こうした点を考慮して浄土思想に言及する漢訳経典を集録した典籍を求めれば、後述するように古くは『阿弥陀仏説林』、矢吹慶輝博士の研究に見出せるが、近年藤田宏達博士によって指摘された浄土思想に言及する関係資料としての漢訳経論〈一覧表〉290部が考えられるであろう[4]。しかしながら、藤田博士の研究はインドにおける原始期の浄土思想の解明という点において為されたものであり、それ故サンスクリット本、チベット訳と校合され、漢訳経論において浄土思想と見做されてもサンスクリット本、チベット訳に認められない経論、或いはインド撰述の疑わしいものは厳密に削除されている。ところが、そうしたかって浄土思想と見做され、或いは中国以降創作された疑経典こそは中国浄土教の関係資料としては欠かせない価値を有していると思われる。われわれは中国浄土教研究の基礎的資料として、まず藤田博士によって除外された浄土思想に言及する経典を広義の浄土教関係疑経典と名づけ、その内容を解明する必要があるであろう。

以上が本研究の意図する必要性と第一の手がかりであるが、第二にこうした除外された経典を通して、インド浄土教研究においては全く無視されていた多数の疑経典の中に認められる浄土思想の存在に気づかされる。むしろ、これら疑経典に認められる浄土思想こそ、本稿の意図する主要経典であり、歴史の上には大きく表われてこないが、中国浄土教の実態を示す一形態・独自の思想と考えて良いであろう。インドから中国へと仏教が伝えられて以来、後漢より宋・元代頃に至るまでの十二、三世紀に渉って、様々な原語から厖大な経典が訳出され、中国仏教はそうした漢訳経典を依りどころとして独自な成立、展開を辿った。これら訳出経典の歴史をわれわれは諸経録を通して知ることが出来るが、すでに最初の経録である「道安録」において失訳、異経、疑経典の存在が認められ、以後経録において知られる数だけでも非常な部数であることを知ることが出来る。まして予

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

想出来ない、経録に載らない疑経典を想像すれば莫大な数量であろう。こうした疑経典についての研究としては、後に述べるように経録により、或いは経典の思想内容の検討により、常盤大定、林屋友次郎、望月信亨博士等によって考証され、また敦煌文献からの研究としては矢吹慶輝博士、そして最近では牧田諦亮博士等の研究において多大な稗益を蒙むっている。[5] そしてこれら疑経典の中にも弥陀信仰の記述がしばしば認められることが指摘されている。しかしながら、弥陀信仰を記述する疑経典の多いことは指摘されているが、それではそれらが如何程あって、どのような思想内容を有していたか等を総合的に取扱った研究となると、個々の特徴ある経典については検討されていても、未だすべてに渉っては為されていないようである。

以上の浄土思想に言及する経典研究、疑経研究の二つの分野を背景として、〈資料篇〉においては、まず現在披見しえた文献を検索し、浄土教に関係する疑経典のすべてを取上げ、諸先学の研究を参看しながら、その一々について考証して行こうと思う。更に〈研究篇〉においては、それらを通して成立・写経年代、思想形態、各経典の変遷等を考えてみたい。そしてこれらの中国浄土教関係疑経典の研究は、それがそのまま中国浄土教の隠された実態の解明になることであり、また従来考えられていた浄土教史における新たな解明をもたらす一資料になることと思われる。

(1) 湛然『止観輔行弘決』巻二（大正46・182下）。

(2) 〈浄土三部経〉の名称は法然『選択本願念仏集』（大正83・1下）からといわれる。親鸞『西方指南抄』巻上（大正83・849中下）参照。

(3) 中国浄土教を三流（慧遠流、善導流、慈愍流）に分類するのは法然（『選択本願念仏集』大正83・2下）からであり、後の諸先師がそれを特徴づけた。中国においては、むしろ慧遠の白蓮社の遺風を継いで発展した蓮宗の系譜として考えられており、従って中国浄土教は多様性という点で特徴があった。『楽邦文類』巻三（大正47・192中～193下）、『仏祖統紀』巻二六（大正49・260下～265上）、小笠原宜秀『中国近世浄土教の研究』pp. 173～185. 参照。また中国浄土教の様々な行業については、道端良秀『唐代仏教史の研究』pp. 190～197、拙稿「中国における密教系浄土思想」（『印仏研』第19巻第2号）参照。

(4) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 136～164。

(5) 第二章第二節第二項参照。

〈資　料　篇〉

第一章　浄土教関係疑経典の用語

そこで、まず本稿で用いる〈浄土教関係疑経典〉という用語について、従来こうした用語は使われていないと思われるので、考察する必要があろう。この言葉は、はじめに指摘した二つの研究分野に渉る用語であるが、夫々の研究分野での用語について、従来の用法を辿ってみよう。

第一の漢訳浄土経典の研究分野で、そうした経論を集録した名称を挙げると、[1]

『楽邦文類』宗曉
『浄土依憑経論章疏目録』長西
『阿弥陀仏説林』継成
『傍説浄土教経論集』浄土宗宗典刊行会
「浄土思想に言及する経論」藤田宏達
『往生要集』源信
『蓮門類聚経籍録』文雄
「傍明浄土の経」望月信亨
「漢訳浄土経論表」矢吹慶輝

などが用いられている。この中、近代以降の用語について考えれば、〈傍明〉或いは〈傍説〉の用語は明らかに正依・正明の〈浄土三部経〉を前提としたものであり、〈漢訳浄土経論〉の用法はその表を見る限り、阿弥陀仏・極楽（或いはその異称）を記述する漢訳経論を意味している。しかし

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

ながら、本稿の意図するところは、傍依・傍明としての従来指摘されていない浄土経典を扱うわけではないし、疑経典を考える点では〈漢訳〉という用語は当然のことであり、その意味では、いずれも本稿に適する用語ではない。従って、最新の〝浄土思想（阿弥陀仏・極楽、或いはその異称）に言及する経論〟という藤田博士の表現が最も適切と思われる。しかし、以下の考察で指摘されるように、本稿で取上げる経典は厳密な意味での阿弥陀仏・極楽等のみの浄土思想に言及する経典にはとどまらない。本稿で指摘する経典には浄土思想に言及しない経典も含まれている。従って、ここではそうした浄土思想に言及しない経典も含めた浄土教に関係する経典という意味で〈浄土教関係経典〉という表現をとったのである。

第二に、疑経研究の分野での用語について考えてみると、まず中国において撰述された諸経録の用語が挙げられる。そこでは[2]、

疑経・偽撰・非真経・全非経愚人妄称経・衆経疑惑・衆経偽妄・疑偽経・偽経・疑惑再詳・疑妄乱真

などの用語が用いられている。次に、日本の浄土教関係目録では、

「偽妄録」長西　　「偽妄濫真類」文雄

という名称が使われている。

更に近代の経録研究者の用法では[3]、

疑偽経・雑経疑偽・異経・偽経・疑経・偽妄経など、従来の疑経録の名称に準拠して用いており、その中でも〈疑偽経〉という用語が多い。また、最近の諸論文では、ほぼ〈疑経〉という名称で統一されているようである。そこで、このように様々に用いられている疑経典の概念であるが、この分野で多くの業績を残された望月信亨博士の〈疑偽経〉についての説明によると〝偽経と称せられるものは全く梵本からの翻訳でなく、支那に於ける好事者の妄作に係るものをいひ、疑経とは真偽未詳のもので、必ずしも皆支那撰述と断定することは出来ぬ。〟[4]ということであり、一括して〈疑経〉として使われる場合は、支那撰述・真偽未詳を含めた印度撰述の疑わしい経典ということになる。しかしながら、次章以降で指摘されるように、本稿で取挙げる経典は従来用いられている厳密な意味での印度撰述の疑わしい〈疑経〉だけには限らない。本稿でも、もとより、浄土教に言及する印度撰述の疑わしい経典が主要ではあるが、その或る数部には、明らかに真経であって、印度では浄土思想を予想しなかったにも拘わらず、中国以降の浄土教徒にとって浄土教経典と解釈され、信奉された経典、正確には疑浄土思想の経典も含まれる。しかしながら、こうした内容を持つ経典について、殊更〈疑浄土教関係経典〉という用語を使うことは、従来全く為されていないし、本稿においてもそれらの占める比重はそれ程大きくはない。ここでは、そうした広い意味で〈疑経典〉という表現を用いる点を注意するにとどめる。

疑経研究の分野において、次に考慮すべき点は、現存疑経典・或いは諸経録に依る疑経典の研究だけに限らず、所謂〈古佚経〉[5]の研究も含まれることである。それらは、今日その全貌を窺うことの出来ない、仏教の諸典籍に一部が引証されて知られている経典であるが、その多くは古佚疑経として指摘されている以外に現存経典の異訳異本の一部分と予想されるものも認められる。また、こうした性格を有する古佚経の中には、従来指摘されていない浄土思想に言及するものも新たに認められるのである。本稿で検討する疑経典の中には、それらの古佚経も含めて論考することにしたい。

以上、〈漢訳浄土経典〉、〈疑経典〉の二つの研究分野についての概念・用法を辿ってみた。従来のこれらの用法から受ける〈浄土教関係疑経典〉の概念は、〈阿弥陀仏・極楽（或いはその異称）に言

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

及する印度撰述の疑わしい経典〉ということになろう。本稿でも、そうした経典の研究が中心ではあるが、すでに指摘したように、次章以降で取挙げられる経典には、阿弥陀仏・極楽に言及しない経典、或いは印度において浄土思想を意味しなかったにも拘らず、中国以降に浄土思想と考えられた真経も広い意味で含まれる。また、〈疑経典〉の概念でも、厳密な意味での印度撰述の疑わしい経典のみに限らず、所謂〈古佚経〉に認められる或る真経の異本なども考慮される。その一々の経典については、次章以降で立証されるであろう。

(1) 一々の典拠については、次章参照。

(2) 諸経録、並びにその出典個所については、すでに経録研究論文において屡々指摘されているから、ここでは註記しない。

また、中国において厖大に訳出された経典の中には、或る時代にすでに訳者の不明な経典、大部の経典を抄略したもの、全くその存在が闕けた経典も多数認められ、それらの中には、撰者の指摘通りの経典以外に真偽未詳・疑義の有する経典も指摘されている。そうした経典を考慮すれば、失訳雑経・失訳経・古異経・異訳経・別訳経・別生経・抄経・闕本経などの用語も広い意味で疑経研究の分野に含まることになる。

(3) たとえば、

小野玄妙「録外経典考」（『仏書解説大辞典』第十二巻所収　昭11年）。

常盤大定『後漢より宋斉に至る訳経総録』昭13年。

林屋友次郎『経録研究』前編　昭16年。

〃　『異訳経類の研究』昭20年。

望月信亨「異経及び疑偽経論の研究」（『仏教経典成立史論』所収　昭21年）。

牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」（『東方学報』京都35　昭39年）。

〃　「松誉厳的の疑経観」（『恵谷先生古稀記念 浄土教の思想と文化』所収　昭47年）。

など。更に個々の経典についての諸研究を考えれば、多くの諸論文に認められるが、ここでは指摘しない。

就中、疑経研究の諸論考は第二章第二節第二項参照。

(4) 望月信亨『仏教史の諸研究』p.150。なお望月博士の研究については、次章で指摘する。

(5) 〈古佚経〉の名称は、望月信亨『仏教史の諸研究』pp.124以下に依る。常盤大定博士は〈逸存経典〉（『後漢より宋斉に至る訳経総録』pp.258以下）、林屋友次郎博士は〈逸存経、別存経〉（『経録研究』前編pp.192以下）などを用いている。牧田諦亮博士は、こうした諸典籍に認められる経典も含めて〈疑経〉を取扱われる。（「中国仏教における疑経研究序説」pp.338、344～345etc.）。

なお、〈古佚経〉については、次章参照。

第二章　関係資料と諸研究

第一節　関　係　資　料

第一項　大正蔵経・続蔵経・敦煌文献など

前章で規定した〈浄土教関係疑経典〉の研究において、最初に問題になる諸資料であるが、今日、われわれが容易に披見しうるまとまった資料としては〈大正蔵経〉〈続蔵経〉〈敦煌文献〉がある。

その中、〈大正蔵経〉1420部については殆んどが真経として収録された経典と考えられているが、しかしその数部はすでに経典研究の分野で疑義が為されており[1]、更にその中には浄土思想に言及する経典も含まれている。また、今日疑義の無いとされている真経についても言及された浄土思想に限り、問題のある経典（たとえば附加挿入など）も考えられる。但し、〈大正蔵経〉すべてについての検討は不可能であり、ここではすでに指摘されている経典、かつて浄土経典と見做されたが藤田博士〈一覧表〉では削除された経典、更にそれらとの関係経典に限って摘出するにとどめる。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

次に〈続蔵経〉について言えば、大正蔵未収経典が主に第一輯第三套第五冊・第八七套第四冊、第二編乙第二三套第四冊等に四〇余部程収められている。その中でも『無量寿仏名号利益大事因縁経』康僧鎧訳、『十往生阿弥陀仏国経』など、13部には浄土思想が認められ、そうした中には浄土教研究資料としては極めて重要な疑経典も含まれている(2)。

第三に指摘される〈敦煌文献〉については、大正蔵第八十五巻疑似部に主要な経典が収められ、その中にも浄土思想に言及する疑経典が数多く認められる。それらの敦煌経典については矢吹慶輝博士『鳴沙余韻解説』に殆んど説明されているが、本稿では更に筆者の披見しえたスタイン影印本に限り、その原本・校正本、更に敦煌目録による諸写本を検索した(3)。また、スタイン本に関しては、Lionel Giles: Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum. London 1957. があり、ジャイルズはその分類に際してOther uncanonical sūtras No. 5145—5205, Apocryphal sūtras No.5206—5472, Unidentified fragments of apocryphal sūtas No.5473—5486と計342部の未収蔵経、疑経、不明疑経断片を指摘している(4)。それらの中には大正蔵第八十五巻未収の経典、或いは大正蔵原本には欠けており(首尾欠等に依り)、他の写本によって知られる浄土思想に言及する疑経典も認められる。そして、逆にその浄土思想によってジャイルズが不明とした断片も経名が判明する場合もある。

以上が今日われわれが容易に検索しうる現存疑経典の第一資料であるが、第二に考えられる資料としては、今日散逸してその全体を知ることは出来ないが、諸典籍に引用された一部分によって、そこに浄土思想が言及されている所謂〈古佚経〉がある。〈古佚経〉について、最も多くわれわれに資料を提供してくれる典籍は、

『経律異相』五〇巻　梁宝唱等集　　『法苑珠林』一〇〇巻　唐道世撰
『諸経要集』二〇巻　唐道世集　　『釈氏六帖』二四巻　五代義楚撰(5)

などであり、すでに望月信亨・常盤大定博士等によってその総合的研究は為されている。そして、それらの一々について検索すると、新たに浄土教関係疑経典と予想されるものが認められる。ただし、こうした古佚経の中には厳密には疑経典では無く、或る経典の同本異訳経、或いは経録には無い改変され、取意略出の経典も認められ、その点注意を要するが、ここでは広義の疑経に含めて取扱うことにする(6)。

(1) 望月信亨『浄土教の起原及発達』第四章　支那撰述の疑偽経 pp.133～257.では、九部の経典を考証され、更に『仏教経典成立史論』後篇　異経及び疑偽経論の研究　pp.299以下、において、『千臂千鉢曼殊室利経』金剛智訳を加えて再論される。また同書「異経及疑偽経表」pp.315～339のうち、〈大正蔵経〉経部第二十一巻迄に収められている経典は8部である。

(2) 〈続蔵〉所収中、大正蔵未収経典のみを扱った研究はないようである。また、本稿で扱う13部のうち、とくに中国撰述疑経典は敦煌写経と密接な関係を有するが、それらについては〈研究篇〉で指摘する。

(3) 従って、ペリオ・北京本をはじめ、個人所蔵・大学所蔵等の原本については校合できなかった。尚、本脱稿直後、北京影印本(東洋文庫)が北大図書館に入庫した。北大教授藤田宏達博士の御好意により、後日検索し、まとめることにしたい。

(4) 王重民『敦煌遺書総目索引』附録 一、Giles: 博物館蔵敦煌巻子分類総目(p.493.)では、apocryphal sūtras を偽経、Unidentified fragments of apocryphal sūtras を其他不明偽経と訳しているが、本稿では前章で考察した如く〈疑経〉と訳す。

ジャイルズ目録には、更にEulogies(讃文)No.6101～6208、Prayers(祈禱文)No.6248～6506の写本があり、その中には阿弥陀仏・極楽等についての讃文・祈禱文(とくにOn Amitābha and Sukhāvatī No.6101～6115)も数

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

多く認められる。こうした資料については適宜関説するが、別に浄土教関係敦煌資料として考察する予定である。なお、そうした資料の概要については拙稿「浄土教関係敦煌写経に関する二、三の問題」(『宗教研究』第218号)参照。

(5) 『釈氏六帖』は披見出来なかった。 常盤大定博士によると、古佚十二遊経に「阿弥陀仏令宝応声吉祥二菩薩……」の記述が指摘されている (『後漢より宋斉に至る訳経総録』pp. 316、349)。

(6) 本稿で扱う古佚経に限っては、その引証文の中に阿弥陀仏・極楽の記述が認められるもののみを対象としたい。この点は現存経典と扱いは異なる。

第二項 浄土教典籍の引証経典概観

(1) 中国浄土教典籍

前項の大正蔵経・続蔵経・敦煌文献に収められた現存疑経典・古佚経の中で、浄土思想に言及する経典の検索が本稿の第一の資料になるわけだが、第二に、それらの依用・流布という点と関連して、中国・日本浄土教史上代表的典籍の中での取扱い、或いは重要な比重を占めて解釈され、浄土思想と見做された経典を考える必要があろう。浄土教典籍における引証経典の中には、以下に指摘するように阿弥陀仏・極楽に言及していないものもあるが、今日〈浄土思想に言及する経論〉と査定されていても、実際には浄土教徒にとって全く依用された形跡の無い経典[1]に較べるならば、それらは、はるかに浄土教史上重要な経典である。

そこで、中国について考えると意図的に浄土経典を集録したものは、『楽邦文類』が挙げられる程度で他には認められない。

以下、中国浄土教史上代表的典籍の概要を辿ると、その最初期の高僧として廬山慧遠(334～416)、また日本浄土教に大きな影響を与えた点での最初の高僧曇鸞(476～542)については、前者は『般舟三昧経』による定中見仏[2]、後者は主著『浄土論註』に引証される『無量寿経』『観無量寿経』『十住毗婆沙(論)』『大智度論』等が指摘されるが[3]、本稿に関係する経典は認められない。

浄土教関係疑経典について、中国浄土教史上、最初に注目される典籍は道綽(562～645)の『安楽集』であろう。『観無量寿経』の綱要書とも言われている本書は、また引証経論の多いことでも知られているが[4]、そうした中には以下の疑経典・古佚経が挙げられている。

『十方随願往生経』『十往生経』『浄度菩薩経』『目連所問経』『惟無三昧経』『須弥四域経』『善王皇帝尊経』

これらの疑経典・古佚経は、単に浄土教典籍における最初として価値があるだけでなく、後に指摘するように疑経研究の分野においても最初期に当る経典として、しばしば取上げられるものであり、その点でも『安楽集』は貴重な資料を提供している。

道綽の影響を多く受けたといわれる迦才の『浄土論』には浄土教所依の経論として、〈十二経七論〉が「第五引聖教為証」に挙げられているが[5]、その中の『十方往生経』(『灌頂随願往生十方浄土経』)、『薬師経』(『灌頂抜除過罪生死得度経』)は経典自体も浄土思想の記述も疑義のある経典である。

日本浄土教に最も大きな影響を与えた善導(613～681)の著述〈五部九巻〉については、古今楷定の『観経四帖疏』を挙げるまでもなく、『観無量寿経』を筆頭に〈浄土三部経〉が中心であるが、意図的に浄土諸経論を集録する記述は無い。しかし、こうした引証経論の中には、『観念法門』に『十往生経』『浄(土)度三昧経』『惟無三昧経』、また『往生礼讃』にも『十往生経』の引証が認められる[6]。善導の場合には、このようにそれ程引証経典の本稿で問題にする比重は大きくはないが、むしろ、

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

日本浄土教に与えた影響により、数多い註釈書の中に、しばしばこれらの経典を含めた諸見解が認められる点に特徴があるといえよう。

善導の弟子懐感・懐惲によって撰述された『釈浄土群疑論』七巻は、その当時までの浄土教に関する多くの疑難に対して法相系の立場で解釈したものといわれる。その巻七に、

問曰。今学浄土業者、既行念仏三昧。未知此法定有何教。今諸方道俗多生疑惑、将無聖教偽行仏法、誘引凡愚大増誹謗。請陳至教以除疑網[7]。

という問がある。この問は浄土教所依の経論を具体的に尋ねたわけではなく、〝現今の浄土の行業を学ぶ者は既に念仏三昧を行っているが、それが何教に有るか陳べよ〟と浄土の行業は念仏三昧であるという前提に立って、その所依の経典を問うのであるが、その答として、

釈曰。諸大乗経説此三昧其文極衆。如華厳経数処皆説念仏三昧、其文極広。及涅槃経・観仏三昧海・賢護・般舟三昧・観経・鼓音声王・大集月蔵分・地蔵十輪経・占察経・文殊般若・花首経・大智度論等説。……。

と経典を引証する。ところがこの中『地蔵十輪経』『占察経』『文殊般若経』『花首経』は、地蔵信仰・一行三昧思想などの代表的経典として中国仏教史の上で極めて重要ではあるが、具体的には浄土思想の説かれない経典である。

中国浄土教における善導流の流れは、唐代後期以降、諸宗融合の風潮に染っていくが、そうした融合的浄土教の先駆者と考えられているのが慈愍三蔵慧日（680～748）である。慧日の浄土教の特色は浄土往生の為の行業すべてを兼修することにあった故、その意味で多くの経論を引証すると予想されるが、現存する『往生浄土集』巻上だけでは窺えない[8]。ただ、本書著述の意図は慧日自から、

初巻先叙異見以教及理逐遣知非。次第二巻広引聖教成立浄土念仏正宗。次第三巻会釈諸教古今疑滞校量諸行出離遅疾[9]。

と述べる如く、第二巻に広く聖教が引かれていたと思われるが欠除して窺えない。更に慈愍流の浄土教は承遠、法照、或いは飛錫等を経て永明延寿（904～975）に至り、宋代以降の融合的浄土教へと展開されるが、そうした代表的浄土教家の著述の中には、すでに取上げた引証経論はあっても、新たな意図的に浄土所依の経典と見做したもの、古佚経は認められないようである。また、それ以降の浄土教典籍の中でも引証経論が多いことで知られている『西方合論』『浄土指帰集』などを検索しても、疑経典という点で特筆すべきことは認められない[10]。

そうした中で、初めに指摘した石芝宗暁（1171～1214）の『楽邦文類』五巻（1200年編）は、楽邦に関する諸文献を意図的に編集したものとして、とくに経呪論を収録している点で特筆すべきものである。

本書巻一には、「大蔵専談浄土経論目録」として、経典46数、呪10首、論６数を挙げ、経典に関しては『無量寿経』10個所、『観無量寿経』６個所が圧倒的に多いが、そうした中で、今日浄土経典とされていないもの、或いは古佚経が挙げられている。更に宗暁はそのいくつかに諸先師の解釈、或いは出典・自釈を附記して、その摘出意図を明らかにしている。ここでそれらの経典と宗暁の摘出理由を挙げると[11]、

『文殊般若経』　修一行三昧専称仏名

天台止観云、……

輔行釈曰、……、経雖不局令向西方、既令専称一仏、諸教所讃多在弥陀故、以西方而為一準、…。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

『随願往生経』 娑婆濁悪偏讃西方

『大集日蔵経』 念仏随心覩見大小

此経所明念仏、雖不定指西方、竊見慈雲懺主念仏方法、引証念仏大小之義、故此録之庶覧彼文者、知経始末。

『目連所問経』 無量寿国易往易取

『十往生経』 念仏之人菩薩守護

『善信摩親経』 善信厭女求生浄土 此縁出経律異相第三十八巻

『守護国界主経』 命終善悪感報優劣

である。この中、『文殊般若経』〈一行三昧〉の思想は、宗暁の指摘に依るまでもなく、『摩訶止観』に述べられる〈四種三昧〉の〈常坐三昧〉の典拠として知られるばかりでなく、初期禅宗史の上でも重要な思想である。[12] ところが、中国浄土教史の上でもそこに述べられる「専称名字」の思想は道綽の『安楽集』をはじめとしてほとんどすべての典籍に重要な比重を占めて引証されているのであり、[13] その中でも善導によって『往生礼讃』において「又如文殊般若云、明一行三昧、唯勧、独処空閑、捨諸乱意、係心一仏、不観相貌、専称名字、即於念中、得見彼阿弥陀仏及一切仏等。問曰、何故不令作観、直遣専称名字者、有何意也。答曰、乃由衆生障重、……観難成就也。是以大聖悲憐、直勧専称名字。正由称名易故相続即生。」[14]と阿弥陀仏への称名念仏と会通されたことは、古来〈無観称名〉と言われる観想・観心の念仏から称名念仏へと峻別された重要な一典拠として知られる点である。『文殊般若経』の念仏はあくまでも十方諸仏の中の一仏であり、是の念中に「過現未来三世諸仏」を見ることであったが、善導がこのように解釈し、或いは湛然によっても〝経に西方に局らずと雖も、諸教の讃ずる所多く弥陀に在り。故に西方を以て一準と為す〟と解釈されたのであり、宗暁もわざわざそれを援用して浄土経典と見做したのである。このように『文殊般若経』についての中国仏教徒の理解を辿れば、この経典は中国仏教全般において主要な役割を有した経典であるばかりでなく、そこには阿弥陀仏の語が認められないにも拘らず、浄土教徒にとって浄土所依の経典と考えられていたことが知られる。ただ、こうした経典の扱いは、夫々の浄土教家の引用経論という研究分野に入ってくるのであり、本稿ではとくに著述者自身が浄土経典と明白に意図したものに限ったが、既に指摘したように浄土教徒の依用の点を考慮するならば単に阿弥陀仏・極楽の記述があるというだけで取上げられている多数の浄土経典よりも、はるかに多大な影響を与えた経典である。そしてこれらの経典についての研究は〝阿弥陀仏・極楽に言及する経典〟という従来の〈漢訳浄土経典〉の概念を超えて、〈浄土経典〉の研究を進めなければ単なる経典だけの研究にとどまり、そうした経典を依りどころとして多様に展開した生きた中国浄土教の解明にはならないことを意味している。

浄土思想に言及していない『大集日蔵経』を挙げるのも同じ理由である。宗暁は「雖不定指西方」と断わりながら、遵式の「念仏方法」[15]を引証として挙げている。『守護国界主経』[16]についても同様のことがいえよう。『随願往生経』『目連所問経』『十往生経』はすでに『安楽集』等に引証されており、『善信摩親経』も〈古佚経〉として知られるものである。

本稿に関係する疑経典の引証という点を考慮しながら、中国浄土教典籍の引証経典についての概要を辿ったが、更に〈古佚経〉の引証という点で留意される一、二の典籍を挙げると、『遊心安楽道』元暁撰に『弥勒発問経』を引証して「爾時弥勒菩薩白言、如仏所説阿弥陀仏功徳利益、若能十

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

念相続不断念彼仏者、即得往生、当云何念。仏言、……、即得往生安楽国土、有凡十念、何等為十、一者……、十者正念観仏除去諸疑」[17]という記述がある。また『西方要決』基撰(?)にも「弥勒問経云、念仏者非凡愚念、不雑結使念、得生弥陀国」[18]とある。しかし〈弥勒経類〉には浄土思想は言及されていない。これが異本からの引証であるが、引証者の作為によるか、とりわけ『西方要決』を含めた基撰とされる一連の浄土教典籍は疑義がある[19]。また同じ基撰とされる『阿弥陀経疏』には『目連問経』の引証があり[20]、現存『目連所問経』とは相応しないだけに〈古佚経〉引証の点で特異な典籍である。

以上、中国浄土教典籍の引証経典について、従来浄土経典と指摘されていない経典に注意して考えたが、一々の経典の考証については後に指摘することにして、結論的に言えば、意図的に浄土経典を集録したものは『楽邦文類』位であり、他には認められない。個々の典籍に関して言えば、道綽の『安楽集』が単に中国浄土教史の上でのみならず、疑経研究の分野でも最初期の〈古佚経〉を引証する点で極めて重要な著述であり、更に『浄土論』『釈浄土群疑論』『西方合論』等に挙げる中の数部の経典、日本浄土教への影響を考えるならば善導の『往生礼讃』『観念法門』に認められる引証経典の理解が留意されると言いうるであろう。

(1) たとえば、今日査定されている大正蔵所収の浄土思想に言及する経典266部の中、135部と半数以上は密教経典である(藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp.138～139)。しかし、それらの密教経典のすべてを浄土教徒が依用したとは認め難い。拙稿「中国における密教系浄土思想」(『印仏研』第19巻第2号)参照。

(2) 『出三蔵記集』巻一五、『梁高僧伝』巻六、「念仏三昧詩集序」(『広弘明集』巻三〇所収)、『大乗大義章』第11など。なお、藤吉慈海「慧遠の浄土教思想」(『慧遠研究』研究篇)参照。

(3) たとえば、〈難易二道〉〈八番問答〉(大正40・826上、833下以下)など。なお、『阿弥陀経』は「舎衛國所説無量寿経」(827中)として引用する。真宗教学研究所編『浄土論註総索引』参照。

(4) 引用経論については、山本仏骨『道綽教学の研究』pp.78～83参照。

(5) 〈十二経七論〉とは、無量寿経・観経・小弥陀経・鼓音声王経・称揚諸仏功徳経・発覚浄心経・大集経・十方往生経・薬師経・般舟経・大阿弥陀経・無量清浄覚経、往生論・起信論・十住毘婆娑論・弥陀偈・宝性論・龍樹十二礼・摂大乗論(大正47・91下～97上)。

なお、『浄土論』の引用経論については、名畑応順『迦才浄土論の研究』論攷篇pp.43～52、末尾「引用経論一覧」参照。

(6) 大正47・24下、25中下、28中。447下。

(7) 大正47・73中。

(8) 『往生浄土集』巻上に認められる引証経典については、拙稿「慈愍三蔵慧日に関する二、三の問題」(『印仏研』第17巻第2号)参照。

(9) 大正85・1236中。

(10) たとえば、『西方合論』明袁宏道撰(大正47・395中～398下)に浄土所依の経典を経緯四類して代表的経典を引証するが、新しい摘出は無い。

(11) 大正47・150上、157下、160上～161中。

(12) 『楞伽師資記』に四祖道信(580～651)の思想として、

要依楞伽経、諸仏心第一、又依文殊説般若経、一行三昧、即念仏心是仏、妄念是凡夫。(大正85・1286下)。

という記述が知られている。道信の念仏に対する理解は〈坐禅観心〉としての念仏であり、浄土教とくに善導の称名とは全く異なる。なお、初期禅宗についての研究は宇井伯寿・鈴木大拙・関口真大博士、柳田聖山教授等非常に多いが一々挙げない。柳田聖山『初期禅宗史書の研究』「文献索引」参照。

(13) たとえば、『安楽集』巻下(大正47・14下)、『釈浄土群疑論』巻七(大正47・73中)、『念仏鏡』(大正47・122上)、『念仏三昧宝王論』巻下(大正47・142上)、『万善同帰集』巻上(大正48・962中)、『西方合論』巻三(大正47・

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

398上）など。

(14) 大正47・439上中。なお、『集諸経礼懺儀』巻下（大正47・466下）参照。

(15) 「念仏方法」（『楽邦文類』巻四所収、大正47・210下）。なお、『大集日蔵経』のこの個所がすでに『釈浄土群疑論』巻七（大正47・76下）に引証されていることは、遵式自身が指摘している。

(16) ただ、当該文は現存『守護国界主陀羅尼経』般若訳、には相応しない。林五邦訳『楽邦文類』（『国訳一切経』和漢撰述50. 諸宗部七 p.68）の註に〝大正19・574上に相当〟とあるが極く一部であり疑わしい。この個所は他に『蓮宗宝鑑』巻八（大正47・341中）にそのまま収録されている。なお『守護国界主陀羅尼経』の浄土思想（大正19・530下）は継成『説林』巻四、矢吹慶輝「漢訳浄土経論表」、藤田宏達「浄土思想に言及する経論」〈一覧表〉にすでに指摘されているが、それとは異なる。継成はそれとは別に『説林』巻七「楽邦文類所挙也。而今経無此文。恐有異本乎。」と自註して挙げている。第三章第二節第四項p.141 参照。

(17) 大正47・114下。なお元暁撰『両巻無量寿経宗要』（大正37・129上）の引証も同じである。当該文の〈十念〉については『無量寿経』の〈十念〉との関連から諸先師によってすでに論考されている。また『釈浄土群疑論』巻五（大正47・61上中）にも『弥勒所問経』〈十念〉の引証があるが区切り型に相違がある。第三章第二節第二項pp.138-139参照。

(18) 大正47・105上。

(19) 望月信亨「慈恩大師の浄土に関する著書及び其の所説」（『浄土教之研究』所収）。

(20) 大正37・318下～319上。

(2) 日本浄土教典籍

中国浄土教典籍に認められる以上の引証経典の概要に対して、それでは日本においてはどうであろうか。

日本浄土教史の変遷をみるとき、法然・親鸞によって開かれた浄土宗・浄土真宗がそれ以降今日に至るまで日本仏教の中でも最も大きな発展を遂げていることは周知の通りであるが、それ故に〈浄土三部経〉・インド中国浄土教典籍・開祖の著述等についての諸註解は枚挙にいとまがないほどおびただしい部数になっている。そうした中でもとくに『安楽集』の末疏、或いは『安楽集』を引証する『選択集』『教行信証』の諸註解をはじめとして、浄土教関係疑経典の解釈も数多く認められるわけであるが、それらについては各疑経典の考証の際に必要のものを参看することにして、ここでは意図的に浄土経典を収録している代表的もののみを取挙げるに留めたい。

その意味で考えられる典籍として、日本初期の浄土教から『往生要集』、また浄土経典収録の集大成として『阿弥陀仏説林』を挙げることには異論ないであろう。

源信（942～1017）が序文において「往生極楽之教行」の為に「聊集経論要文」と自から意図した『往生要集』三巻には、総数一千回に近い経律論疏の引文が典拠として挙げられているが、[1] その中でもとくに源信自身がまとめて挙げた経論としては[2]、

大文第三〈明極楽証拠〉として、迦才『浄土論』〈十二経七論〉を引いた後に、

私加云、法華経薬王品、四十華厳経普賢願、目連所問経、三千仏名経、無字宝篋経、千手陀羅尼経、十一面経、不空羂索、如意輪、随求、尊勝、無垢浄光、光明、阿弥陀等諸顕密教中、専勧極楽不可称計。

と挙げ、

大文第九〈明往生諸行〉の第一〈明諸経〉として、

四十華厳経普賢願、三千仏名経、無字宝篋経、法華経等諸大乗経。随求、尊勝、無垢浄光、如意輪、阿嚕力迦、不空羂索、光明、阿弥陀、及龍樹所感往生浄土等咒。

更に、『大阿弥陀経』『十往生弥陀仏国経』『弥勒問経』『宝積経第九十二』『観経』『双観経』の

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

引文を挙げ、また、

大文第十〈問答料簡〉の最後第十〈助道人法〉の中で「何等教文念仏相応」という問いに対して、ほぼ総まとめとして『観無量寿経』『双観無量寿経』『観仏三昧経』『般舟三昧経』『念仏三昧経』『十往生経』『十住毘婆沙論』『小阿弥陀経』『無量寿経優婆提舎願生偈』『摩訶止観』『観念法門』『六時礼讃』『(天台)十疑』『安楽集』『西方要決』『群疑論』『浄土論』『瑞応伝』の経論、浄土教典籍を各書の特色を説明して挙げ、

其余雖多、要不過此。

と結んでいる。

もとより、これらの経論、或いは他の個処で引証された経論においても、すでに代表的な浄土経論と指摘されたものが圧倒的に多いわけであるが、そうした中でも、

十往生経、目連所問経、随願往生経、日蔵経、優塡王作仏形像経、文殊般若経、占察経、弥勒問経、

などの疑経、古佚経、或いは今日浄土経典とされていない真経が、しばしばそれも重要な典拠として引証されている[3]。そして本要集の特色は浄土経論を意図的に取挙げている点で価値が認められる。

『往生要集』が日本浄土教史の上で浄土宗、浄土真宗成立以前に著された浄土思想に言及する経論を集録した代表的典籍であるとすれば、法然によって〈三経一論〉が規定され、親鸞によって〈浄土三部経〉並びに〈七祖聖教〉が重視された以降の所謂〈宗学〉の歴史の中で、浄土経論に関して最も顕著な業績を示した典籍は浄土真宗継成(　～1774)によって集記された『阿弥陀仏説林』七巻(1771年)である。本書に集録された諸経論二百五十余部はそのまま矢吹慶輝博士〈漢訳浄土経論表〉に引継がれたわけであり、そうした中の疑義ある経典については後にゆずるが、ここで本稿に関係する本書の特徴について指摘しよう。まず第一の点は、それまでの著述者の信仰にとって浄土経典と解釈され、引証された態度と異なって、阿弥陀仏(無量寿仏、無量光仏など)、極楽(安楽、安養など)の記述が認められる経典のみに限ったことである。この点は、後に矢吹慶輝博士、更に藤田宏達博士の梵蔵本との校合による検索に通ずる〝阿弥陀仏・極楽に言及する経典〟が〈浄土経典〉であるという今日の概念の源になるわけであり、この態度は経典研究の点からみれば確かに秀れた卓見と云わねばならない。しかしながら、すでにみた様に中国・日本浄土教徒にとって、それらの経典が実際にどの程度依りどころとなり、それらの経典によって何人が浄土教を信奉したか、という生きた経典の価値を問うならば、そこには継成によって初めて浄土経典と見做され、或いはただ単に、阿弥陀仏・極楽について言及しているというだけに過ぎない経典もあるわけである。ただ継成にとってはこうした点を当然配慮したと思われ、『楽邦文類』で指摘された『大乗大集日蔵経』『目連所問経』『善信摩親経』『守護国界主経』『文殊般若経』を巻七〈追録〉に自註を附して挙げている。第二の点は、明らかに疑経典と知られる経典は一つも挙げられていない。すでに『長西録』『経籍録』が世に出ているのであり、よしんばそれらを見ていないにしても、浄土思想に言及する数部の疑経典の存在は知っていたと思われるが[4]、そうした経典は指摘されていない点である。

以上、日本浄土教における代表的典籍として『往生要集』と『阿弥陀仏説林』を取挙げた。前者はあくまでも(浄土)往生(の為の)要(文の)集(録)として、自己の信仰に所依となる経典を取挙げたものであり、そこにはすでに指摘した中国浄土教典籍における引証と同じ様に、浄土経典と解釈され信奉された経典、或いは自己の信仰にとって所依となるなら疑経典であっても、それを

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

引証している。そしてこの態度は『楽邦文類』をはじめとする中国浄土教家の態度にそのまま共通するものである。一方、『阿弥陀仏説林』は『楽邦文類』の査定した疑義の有する浄土経典を〈追録〉に挙げながらも、今日の浄土経典の概念につながる厳密に経典研究の立場に限り、疑経典・古佚経は除外されている。もとより『説林』集録の経典の中には今日藤田宏達博士によって除外され、或いは疑経研究の分野において疑義ある経典も認められるのであるが、梵蔵本の知らない当時においては釈尊金口の教えとして大蔵経に収められていた真経と認められたほぼすべてを渉猟したのであり、その業績は高く評価されねばならない。

(1) 花山信勝『国訳一切経 和漢撰述67 諸宗部二四』「往生要集解題」参照。

(2) 『浄土宗全書』巻一五。pp. 65、130～132、154。

なお、前註『国訳一切経』和訳本には、これら一々の経論の大正蔵巻数、番号を註記しているが、就中『随求』に対して、「随求。〔大正20巻1154番経〕」(p. 60)、「随求。(仏説随求即得大自在陀羅尼神呪経)〔大正20巻1154番経。〕」(p.189) とする註記は『普遍光明清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』唐不空訳に訂正すべきであろう。両経は同本異訳であるが、前経宝思惟訳には浄土思想は認められないのに対して、不空訳(大正20・625上、626上) には浄土思想に言及している。

(3) こうした経典の中に、〈古佚疑経〉の『弘猛海慧経』の引証(「若有称念百千倶胝那庾多諸仏名号、復有暫時於我名号至心称念、彼二功徳平等平等、諸有称念我名号者一切皆得不退転地。」『浄土宗全書』巻一五、p.61、なお『開元録』巻一八、大正55・675中、参照) がある。〈称念思想〉の一典拠として重要な引証であろうが、浄土思想に言及しない〈古佚経〉故、本稿では取挙げない。また『般舟三昧経』の引証としての「如阿弥陀国菩薩見無央数百千仏、得是三昧菩薩然、当見無央百千仏」(『浄土宗全書』巻一五、pp.119～120) は現存『般舟三昧経』には認められない。

(4) たとえば、『楽邦文類』巻一の疑義の有る疑典を挙げているにもかかわらず、『十往生経』を外しているし、或いは真宗学者として『安楽集』などを読んでいないとは思えない。ただ継成の検索は大蔵経(『明蔵』) に当ってなされたのであり、あくまでも当時の真経に限ったのであろう。

以上、中国・日本浄土教史の上で浄土経典を意図的に集録した典籍を中心に、今日〈浄土経典〉と認められていない広義の疑経について辿ってみたわけであるが、その中には正確には疑経でない経典も含まれる。経典が或る時代、或る人々にとって、如何なる救い・修行の依りどころであったかという価値を問う立場を考えるならば、単に経典研究の立場だけにとどまることなく、こうした社会的意義を考慮した扱いも重要な研究分野であり、その意味で資料的価値は認められるべきであろう。

第三項 諸経録

派土教関係疑経典の資料として、第一に〈大正蔵〉〈続蔵経〉〈敦煌文献〉所収の現存疑経典、並びに諸典籍に引証された〈古佚経〉の検索。第二に中国・日本浄土教史上の代表的著述に認められる引証経典が考えられるわけであるが、第三に疑経典の成立年代、流布変遷を査定する上での根拠となる〈経録〉について取上げる必要があろう。

先ず中国についていえば、浄土経典のみを集めた目録はない。中国における現存経録は十七部であるが、その中「道安録」から『貞元録』に至るまでの疑経・失訳雑経目録は重要な資料である。更に経典によっては疑経・失訳経と査定されたものが闕本経、抄訳経、そして真経と変更増部が認められるのであり、そうした点を考えると問題のない宋代以降の三目録を除いた残りの十四部に記録された経典の考証が必要になる[1]。また、こうした経録とは異なるが、そうした経典が何時頃盛んに行われていたかを知る為には敦煌文献に認められる奥書の写経年代が大きな手掛かりとなる。疑経典はその性格上、むしろ経録には載らないものも多数認められるのであり、そうした場合、写経

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

年代を記した経典は、その数が少ないにしても、それらを通して成立・流布の様相を窺うことが出来るであろう。

日本についていえば、浄土教経典疏鈔目録として、

浄土依憑経律論章疏目録一巻　長西（1184～1228）撰

蓮門類聚経籍録二巻　文雄（1700～1763）撰

浄土真宗教典志三巻　玄智（1734～1794）撰

が挙げられる[2]。

その中でも『長西録』には「偽妄録第十」の項があり、

『九品往生経一巻』不空訳、『浄土阿弥陀経』一巻、『四十八願阿弥陀経』一巻　阿地瞿陀訳、『無量寿経』一巻、『無量寿(経）浄土阿弥陀経』一巻、『浄土三昧経』一巻、『往生浄土本経』

を挙げており、『経籍録』には「偽妄濫真類」として、

『九品往生経』一巻　不空三蔵、『浄土阿弥陀経』一巻　闕訳人、『〇浄土本縁経』一巻、『四十八願阿弥陀経』一巻　阿地瞿多、『根本秘密神呪経』一巻　闕訳人、『仏説阿弥陀三時海経』畺良耶舎、『仏説無量寿如来至真等正覚経』法力三蔵、『仏説九品往生阿弥陀三摩地陀羅尼経』一巻　不空三蔵

が挙げられている。これらは、すべて信を置き難いけれども、その当時の浄土疑経典の様相の一端を示すだけでなく、今日、現存する経典も含まれるのであり、成立・流布を考える重要な資料である。

更にこうした目録には、今日疑義のある経典、或いは浄土経典と見做されていない経典が、傍依の浄土経典として考えられて挙げられている。ここでそれらを摘出すると、『長西録』「群経録第一」には五十四経百四十三巻の浄土依憑経典を指摘するが、

『浄土三昧経三巻』失訳、『十方随願往生経』一巻　東晋帛尸黎蜜多訳、『灌頂抜除過罪生死得度経』一巻　宋恵簡訳、『弥勒菩薩所問経』、『十往生経』一巻、『華手経』一巻、『優塡王作仏形像経』一巻　失訳、『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』三巻、『菩薩内蔵経』一巻 耶舎崛多等訳

などは、明らかな疑経、疑義の有する経典、浄土思想の認められない経典である。更に『経籍録』の「傍依経本類」は〝長西録の録する所を明蔵目録とこれを対検し、因に麗蔵目録を討尋し、……。〟と述べて挙げているように、『長西録』所載の経典はすべて収録されている[3]。『真宗教典志』巻一「旁依経論」にも

随願往生経一巻　　十往生経一巻

仏説地蔵菩薩発心因縁十王経一巻

が、それぞれ細註を附されて挙げられている。これらは、今日の浄土経典研究、疑経研究の分野でいずれも問題のある経典であるが、撰者は疑わしいものには註記しながらも浄土傍依の経典と指摘している。

以上、諸経録に認められる経典の主なものを指摘したが、これらの諸経録の検討の外に、『奈良朝写経目録』[4]の検討は経典の撰述を考える場合の参考になる。現存疑経典の中にはその性格上、中国撰述・日本撰述の未詳のものが認められるのであり、そうした場合に日本仏教最初期の写経目録に記載の有無は、その成立の時・所、更にその変遷を考える場合の大きな典拠といえるであろう。

(1) 各経録の部・巻数については、すでに経録研究論文にしばしば紹介されているのでここでは触れない。

(2) いずれも『大日本仏教全書』(昭和七年刊）巻一所収。

(3) 就中、『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』が何を示すか不明である。『経籍録』は本経に対して「此経未捜得之。疑

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

長西所録略題歟」と細註する。また『菩薩内蔵経』も如何なる経典か不明である。『経籍録』にも「此経亦諸録不見。蔵字恐戒誤」(『大日本仏教全書』巻一、p.380)とあるが、『菩薩内戒経』には浄土思想は認められる(大正24・1029上、1031上)。また類似の経名として『菩薩蔵経』があり、そこに「西方跋陀羅世界賢謂、於彼有仏名無辺光明」(大正24・1087上)と浄土思想(?)を予想させる記述が認められる。当該文に対して、矢吹博士〈漢訳浄土経論表〉、〈傍説浄土教経論集〉(『浄土宗全書』巻一、p.202)は浄土経典と見做すが、後に藤田博士〈一覧表〉では西方跋陀羅世界は極楽と異なる故、浄土思想に非ずと削除された経典である。

(4) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』。

第二節 従来の諸研究

第一項 漢訳浄土経論研究

前節において〈浄土教関係疑経典〉に関する関係資料として、第一に現存資料として〈大正蔵経〉〈続蔵経〉〈敦煌文献〉、そして〈古佚経〉。第二に浄土教典籍に引証される経典、第三に経録、を取挙げた。本節ではこうした研究分野におけるまとまった代表的研究について考えてみたい。

そこで〈漢訳浄土経論〉の研究分野ではすでに指摘した如く、

矢吹慶輝博士 「漢訳浄土経論表」

藤田宏達博士 「浄土思想に言及する経論〈一覧表〉」

が挙げられる[1]。

矢吹博士の「経論表」は『説林』の引文を『縮刷大蔵経』中に検文し、訳者の年代順に配列し、〈仏名・国土名・関係仏名〉を254部に渉って指摘したものである。

藤田博士の〈一覧表〉は、それを基礎にしつつも、現在披見しうる限りのサンスクリット本・チベット訳の校合により、〈サンスクリット本・チベット訳〉の典拠を加え、すべて『大正蔵経』の典拠を明らかにして290部を指摘している[2]。

この両研究が『説林』以前の著述と根本的に異なる点は、いずれも〈インド浄土教〉の研究にとっての資料として挙げられたことに共通点があり、それまでの著述者自身にとっての理解、浄土教所依の経論ではないことである。もとよりこうした態度は学問の客観性から考えれば自明の方法であり、インド浄土教の研究という点から見れば当然のことであるが、中国・日本浄土教における各経典の依用流布という宗教としての変遷を考えれば、それ以前の典籍において浄土経典と解釈され信奉された経典も捨てることは出来ない。

次に両研究の相違を挙げるならば、藤田博士の研究は今日披見しうる限りのサンスクリット本・チベット訳との校合による原始浄土思想の資料としての経論の摘出であって、矢吹博士が浄土経典と見做していた数部についても、その原語から考えても浄土思想に非ずと厳密に削除している。両研究指摘経論の異動を挙げれば、

	矢吹博士表	藤田博士表
共通経論	245部	245部
独自の経論	9部	45部
総 計	254部	290部

となる。

ここで、本稿にとっての当面の問題は、藤田博士がインドにおいては浄土思想を予想したもので

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

はないと除外された九部の経典の検討である。それらがそれ以前の浄土教徒にとって浄土思想と解釈され信仰の対象となっていたならば、われわれは広い意味での浄土教関係疑経典として取挙げなければならないであろう。その九部とは、

菩薩道樹経　呉支謙（『説林』巻三）
菩薩蔵経　梁僧伽婆羅
最勝仏頂陀羅尼浄除業障経　唐地婆訶羅（『説林』巻三）
金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法　唐金剛智（『説林』巻六）
成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌経　唐不空（『説林』巻六）
百千頌大集経地蔵菩薩請問法身讃　唐不空（『説林』巻六）
目連所問経　宋法天（寒十ノ同経ニナシ『説林』巻七）
無量寿大智陀羅尼　宋法賢（『説林』巻四）
大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経　宋法天

である。いずれも矢吹博士「経論表」で浄土経典とされたものであり、『説林』ではその中で七部を挙げている[3]。藤田博士はこれらをサンスクリット・チベット本等によって浄土思想に非ずとされたわけである。これらは諸経録の上ではその訳出者に異論のないものであり、従ってインド撰述の真経に属する経典であるが、その浄土思想の記述が疑とされるものであり、疑浄土思想関係経典と見做されるものである。こうしたかって浄土経典と考えられ、今日では非浄土経典とされたものの記述についても一応考慮する必要があるであろう。

(1) 矢吹慶輝『阿弥陀仏の研究』附録五　漢訳浄土経論表　pp. 449～474。
藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 136～164。
外に、望月信亨「傍明浄土の経並に論集目次」(『浄土教之研究』pp. 36～55)、浄土宗宗典刊行会編「傍説浄土教経論集」(『浄土宗全書』巻一　所収）が考えられるが、いずれも経典名・訳者名を挙げるのみで、その当該文等の記述がなく使用にたえない。

(2) 今日の水準では、藤田博士〈一覧表〉が浄土経論に関する代表的ものであるので、後の疑経典との比較の参考の為に、その概要を示すと、
総計 290部
阿含部　1、　本縁部　5、　般若部　3、　法華部　10、　華厳部　11、　宝積部　27、　涅槃部　7、　大集部　11、　経集部　56、　密教部 135、律部 3、釈経論部　4、　瑜伽部 10、　論集部　6、　史伝部　1、
である。なお、この部数については第1刷本では多少相違している。

(3) 矢吹博士「経論表」、藤田博士〈一覧表〉のいずれにもなく、『説林』のみに認められる経典には、
観自在如意輪菩薩瑜伽法要　唐金剛智
がある。

第二項　疑経研究

前項においては〈漢訳浄土経論〉の研究について取挙げたが、次に本項では〈疑経研究〉の分野における代表的論考について考えてみる。この分野における初期の研究としては望月信亨博士による一連の疑経研究論文が指摘される。

『浄土教の起原及発達』pp. 133～257　　『仏教史の諸研究』pp. 124～166
『仏教経典成立史論』pp. 299～531

という厖大なスペースの諸論文は主に〈経録〉の検討、思想内容の他経との比較等によって指摘さ

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

れたものであるが、それらの中には藤田博士〈一覧表〉で挙げられた経典が四部認められる。

灌頂経巻十一（灌頂随願往生十方浄土経）　東晋帛尸梨蜜多羅

灌頂経巻十二（灌頂抜除過罪生死得度経）　同　上

大仏頂首楞厳経　唐般刺蜜帝

千臂千鉢大教王経　唐金剛智[1]

がそうであるが、更に望月博士が指摘した疑偽経の中で検索の結果浄土思想に言及する経典を渉猟すると、

善王皇帝経、惟無三昧経、無量寿仏名号利益大事因縁経（曹魏康僧鎧訳）、観世音菩薩往生浄土本縁経（附西晋録）、念仏超脱輪廻捷径経、十往生阿弥陀仏国経、阿弥陀仏覚諸大衆観身経、九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経、阿弥陀仏根本祕密神呪経

等々、実に三十余経に認められる。もとより望月博士の研究は疑偽経論全般についての論考であり、浄土思想に言及する疑経典のみを考察したわけではないから、その意味での論述は極めて少なく、その思想内容等には触れていないが[2]、少しく目を通すと多数浄土思想に言及する疑経典が認められるのである。更に望月博士には〈古佚経〉についての論文があり[3]、それら200個所を超える遺文を検べ直すと、すでに『安楽集』等の周知の〈古佚経〉の外に、なお数経見出せるのである。

経録、諸典籍の引文、経典相互の思想比較等を中心とする疑経研究として望月博士の研究が挙げられるとすれば、敦煌文献の研究により数多くの敦煌出土疑経典を考証された矢吹慶輝博士の業績も特筆すべきであろう。二十世紀初頭に発見されたおびただしい敦煌文献は、今日でこそ大英博物館、巴里国立図書館、北京図書館等に所蔵されて、われわれもマイクロ・フイルムによって披見しうるようになったが、博士は未公表の時代に大英博物館に赴いて、数々の苦労の末写真入手したものである[4]。就中、二百部余を影印したのが大著『鳴沙余韻』であり、その内容を紹介したのが『鳴沙余韻解説』である。ただ博士がそこで挙げられた疑経典の殆んどすべては、現在『大正蔵経』第八十五巻疑似部に全文が収められているので、ここでは『鳴沙余韻解説』の中で浄土思想の認められる疑経典について指摘することにする。敦煌文献中の疑偽経について博士は「第一部正編　四雑経疑偽」で三十五部、「第二部　疑偽仏典及び敦煌出土疑偽古仏典に就いて」にそれらを含めて四十余部を解説される。そうした中でも浄土思想に言及する疑経典を指摘されるが、とくに意図的に論述する個所としては、第二部に「敦煌浄土教研究資料に就いて」の一章を設けて主要な資料を考証している。その「五　雑経疑偽」として、

山海慧経、救疾経、太子讃経、救護身命済人病苦厄経、続命経、無量大慈教経、三厨経等、大乗無量寿宗要経

を挙げる[5]。それらは博士自から浄土経典として挙げたものであるが、更に四十余部の疑経典の中から浄土思想の認められるものを摘出すると、

観経、大通方広経、勧善経、新菩薩経、大方広仏花厳経普賢菩薩行願王品、普賢菩薩行願王経、現在十方千五百仏名並雑仏同号、普賢菩薩説此証明経、地蔵菩薩経

等に認められる。これによってみても浄土思想に言及する敦煌出土疑経典の量の無視出来ない点が判明するであろう。ただ矢吹博士の研究においても浄土教資料としての疑経典の論述は極めて少ない為にそのすべてを指摘しているわけではない。われわれはそうしたすべてを再検索することによって、また新たな敦煌写経における浄土思想の特徴を見出すであろう。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

疑経研究の分野における内容を異にする二つの代表的研究を取挙げたが、ここで近年の総合的研究として、最後に牧田諦亮博士の業績を挙げて、関係資料並びに従来の諸研究の章を終ることにしたい。牧田博士の研究は、こうした二つの研究態度をふまえつつ、いわゆる真経とは異なった疑経のみが有する製作の背景、その流伝を探求することにより、民衆仏教の本質・実態を解明することにあり、その点では単なる経典研究の立場を超えたところに大きな特色がある。博士は敦煌文献の中の疑経について一連の論文を発表されているが、ほぼ総合的に扱った研究としては、

中国仏教における疑経研究序説 —敦煌出土疑経類をめぐって—(『東方学報』京都 第35冊)

を挙げることが出来る。当論文には152部の疑経典が扱われているが、その中で浄土教と関連させて論述された疑経典は、

善王皇帝経、惟務三昧経、須弥四域経、大通方広経、観世音三昧経、救苦観世音経、

である。更に浄土教に関係する疑経典としては、

十二遊経、十方随願往生経、三厨経、十往生経、地蔵菩薩経、高王観世音経、救疾経、救護身命済人病苦厄経、浄土三昧経、普賢菩薩行願王経、無量大慈教経、須弥像図山経、新菩薩経、勧善経、灌頂抜除過罪生死得度経、続命経、

などである。これらの疑経典は、もとより望月・矢吹両博士の研究においても指摘されたものも含まれているわけであるが、疑経典の思想的特徴を考える場合に浄土教は欠かすことの出来ない大きな比重を占めて中国仏教の中に生きていたことを物語っている。

以上、疑経研究の分野における代表的研究の中から、浄土教に関係する疑経典の大要を窺ったが[(6)]、今みた如くそのすべてに渉って考証したものは無いのであり、本稿における意図として、それらを再検索し検討することは、それなりの価値が認められよう。

(1) 大正蔵巻20所収の本経訳者は不空となっている。その間の事情については『仏教経典成立史論』pp. 521～524.『仏書解説大辞典』巻7「本経」の項参照。

(2) 疑経典の中で、とくに〝弥陀関係の経典としては……〟と九経についての論述がある。『仏教経典成立史論』pp. 352～354。他は間接的に指摘されるだけである。

(3) とくに「古佚経の遺文」(『仏教史の諸研究』所収)、「異経及疑偽経表」(『仏教経典成立史論』pp. 314～339) 参照。

(4) その間の事情については『鳴沙余韻解説』「後記」に詳しい。また、日本の初期敦煌学の状況については、神田喜一郎『敦煌学五十年』参照。

(5) なお、矢吹慶輝「支那仏教史と現存偽経」(『宗教研究』臨時特輯号 昭和六年) にも類似の論述が認められる。

(6) 個々の疑経典の研究論文の中で、とくに浄土教に関説する論文としては、

牧田諦亮「浄度三昧経とその敦煌本」(『仏教大学研究紀要』第37号)

〃 「仏説三厨経について」(『宗教研究』第174号)

〃 「松誉厳的の疑経観」(『恵谷先生古稀記念 浄土教の思想と文化』)

小笠原宣秀「敦煌本勧善経をめぐって」(『東方宗教』22号)

石浜純太郎・芳村修基「無量寿宗要経とその諸写本」(『西域文化研究』第1巻)

佐藤成順・大南竜昇「十往生経の研究」(『三康文化研究所年報』3号)

岩佐貫三「十王経思想の系統と日本的摂取」(『印仏研』12巻1号)

内藤竜雄「敦煌ペリオ本三八四号残欠経典目録について」(『印仏研』17巻1号)

平野順照「敦煌本無量寿経五悪般について」(『印仏研』18巻2号)

など挙げられるが、個々の疑経典考証の際に指摘する。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

要　結

以上、本章では関係資料並びに従来の諸研究について、とくに中国・日本浄土教家の浄土経典の解釈、取扱いを中心に辿ってみた。その結果、以下のことが結論づけられるであろう。

浄土教関係疑経典を問題にする場合、今日われわれが容易に披見しうる〈大正蔵経〉〈続蔵経〉〈敦煌文献〉が基本的資料となるのは当然であるが、その研究分野として二つに大別される。その一つは浄土経典の研究であり、その二は疑経研究の分野である。

第一の浄土経典の研究分野では、真経・疑経に限らず、道綽の『安楽集』より中国では宗曉の『楽邦文類』、日本では源信『往生要集』に至るまでの態度は、あくまでも自己の信仰、思想形成の依りどころとしての引証経典という立場であり、その意味では阿弥陀仏・極楽に言及しない経典、或いは疑経典であっても釈尊の真意と違わなければ浄土経典として引証する点に特徴があった。ところが、浄土経典集録に最も業績を残した継成『説林』を媒介として、近代の浄土経論研究に至ると、とくにインド浄土教の資料としての経典に重点を置くが故に、中国・日本浄土教家のこうした態度はすべて排除され、阿弥陀仏・極楽に言及する真経のみという厳密な経典研究の立場になった。そしてその集大成としてサンスクリット本・チベット訳に無い記述は漢訳において無量寿・無量光などという記述があっても浄土思想に非ずと削除された藤田宏達博士の研究に至ったわけである。しかしながら疑経典の成立事情を考えるならば、そこには必然的に或る時代、或る社会の要請によって偽作されたのが疑経典なのであり、その場合には厳密な経典研究の立場を守りつつも、更に先人の立場をも考慮しなければならないであろう。そしてこのことは、とくに浄土教関係諸経典を基礎的資料として成立・展開した中国浄土教の研究としては不可欠な態度と思われる。本稿において比較的長いスペースを割いて中国・日本浄土教家の代表的典籍の引証経典を取挙げたのもその理由による。

そうして浄土経典に関するこうした点を考慮すれば、今日浄土教の基礎的資料となる〈浄土教関係経典〉というのは、

(一)　従来指摘されている真経。

(二)　インドでは浄土思想を予想したものではなかったが、中国以降に浄土思想と解釈された経典。

(三)　インド撰述の疑わしい経典。

ということになろう。本稿では当面の問題として、(三)の疑経典を中心としながらも、(二)の経典についても附随的に考察していこうと思う。

第二の疑経研究の分野においては、各経録において真経、疑経、失訳雑経、抄経、闕本経等の分類はなされていても、そうした分類の際の編纂者の態度についてはすべて明確とは言えない。その意味では望月博士等の近代の研究から考えれば良いわけであるが、この場合にも浄土経典研究の分野の場合と同様に、その取扱いには経典研究から更にその疑経典の時代背景、社会事情の考察に至るまでの推移が認められる。本稿ではこうした諸先学の研究に依拠しつつ、とくに中国・(日本)浄土教の実態を考慮しながら、考察を進めることにしたい。

第三章　浄土教関係疑経典の分類

前章までに考察したように、本稿で扱う〈浄土教関係疑経典〉の対象経典は厳密な意味での〝阿弥陀仏、極楽に言及するインド撰述の疑わしい経典〟の外に、第1にインドにおいては浄土思想を

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

意味しなかったが、中国以降浄土思想と考えられた経典、並びに浄土思想に言及していないにもかかわらず、中国浄土教徒にとって所依の経典と扱われた経典、即ちこの両者は疑浄土数関係真経というべき性格の経典が含まれる。第2はすでに散佚してその全貌を窺えない諸典籍に部分的に集録、引証された浄土教関係古佚経、並びに経録によってのみ予想される疑経典、或いは浄土教徒にとって浄土教所依の経典と見做された疑経典が含まれる。

本章ではそれらの一々について各経典の持つ性格から分類して考察することにしよう。

第一節　浄土思想と見做された真経

本節に挙げる経典を浄土思想と見做す典拠の略号として、

説　林：『阿弥陀仏説林』
傍　説：『傍説浄土教経論表』(『浄土宗全書』巻一)
矢吹表：矢吹慶輝「漢訳浄土経論表」
藤田表：藤田宏達「浄土思想に言及する〈一覧表〉」

を用い、必要に応じて※印で考証する。

第一項　原語の異なる経典

大乗無量寿宗要経

S.2078etc.230部、P.29部、散18部

cf. 矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』Ⅱ.「大乗無量寿宗要経に就いて」
石浜純太郎 芳村修基「無量寿宗要経とその諸写本」(『西域文化研究』第一)

大乗無量寿経　法成訳(?)

大正19・82上以下

cf. 藤田表 No.241

成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌　唐不空

次当即誦無量寿命決定如来真言七遍、作是念言、願一切有情、皆獲如来無量寿命

大正19・596中

cf. 説林巻六、矢吹表

大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経　宋法天

大正19・85上以下

cf. 傍説、矢吹表

無量寿大智陀羅尼　宋法賢

阿波哩弥多喩

大正21・907中

cf. 説林巻四、傍説、矢吹表

以上の『大乗無量寿宗要経』並びにその異本、関連経典に認められる無量寿(無量寿命決定、無量寿決定光明王)如来が中国・日本において阿弥陀仏と解されたかどうかが問題である。

就中、『大乗無量寿宗要経』の写本は敦煌文献で270余部、諸原語を含めると数百種ある(石浜純太郎 芳村修基 前掲論文)と言われている。また、大正蔵所収の『大乗無量寿経』は『大乗無量寿宗要経』の一写本であるが「㊊唐代写高楠順次郎氏蔵敦煌本、㊥大英博物館蔵古写本」とあってスタイン番号が不

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

明故別に挙げた。藤田博士が浄土思想に言及する経典として挙げられたのは、本経の中の「若有自書写、教人書写是無量寿宗要経、受持読誦、当得往生西方極楽世界阿弥陀浄土。」（大正19・84上）の記述を示すのであり、この点では浄土経典に属するものである。

そこで、本経の主仏たる無量寿如来であるが、この無量寿の原語はAparimitāyu-であり、Amitāyu-、Amitābha-では無い（矢吹博士：前掲書、山田竜域『梵語仏典の諸文献』p.157)。矢吹博士は前掲書（esp. pp. 150～154）で阿弥陀仏との同異について諸解釈を紹介されているが、その決定はされていない。しかし「漢訳浄土経論表」ではその異本を挙げているから、その段階では浄土思想と見做したのであろう。藤田博士は、原語の異なる点、西域中心に諸原語を含めて多数の写本があることは当然そうした地域ではAparimitāyu-信仰であったと思われる点、中国には阿弥陀仏と解した典拠の無い点等より、『大乗無量寿経』の当該文章以外の典拠を削除された（藤田博士の御示教による)。もとより原語の判明した現在ではそれを阿弥陀仏と見做すことは誤りであるが、浄土経典とされるものの中には原典の無い為に判定の出来ない無量寿陀羅尼がしばしば認められるし、また次項で指摘する経典をはじめとして無量寿、無量光、或いは阿蜜唎多等の訳語の類似から阿弥陀仏と考えられた経典もあるわけであり、『説林』が解釈したようにこれらの無量寿は浄土教の無量寿仏と見做された経典と扱っても良いと思われる。

第二項　原語の疑わしい経典

菩薩道樹経　（私呵昧経）　呉支謙

於是世寿終後　便生上兜術天　当願生安隠国　寿無極法王前

大正14・813上

cf. 説林巻三、傍説、矢吹表

陀隣尼鉢経　東晋曇無蘭

爾時、去是仏刹百千億拘利仏刹、過爾所仏土、其刹世界名阿難陀拘蠶（晋言華積）、彼仏号伊迦波提羅耶（晋言最上天主）如来至真等正覚、今現在遣両菩薩、一名阿弥陀法（晋言無量光明）、二名摩訶法（晋言大光明）。

大正21・865中

異本：　安宅陀羅尼呪経

一名大光、二名無量光、(大正19・744上)

持句神呪経　呉支謙

一名無量光明、二名大光明、(大正21・864下)

東方最勝燈王陀羅尼経　隋闍那崛多

一名大光、二名無量光、(大正21・866上)

東方最勝燈王如来経　隋闍那崛多等

一名大光菩薩、二名甘露光菩薩、(大正21・868中)、尚、藤田表No.116で指摘する無量寿（大正21・871中）は当該個所と異なる。

聖最上燈明如来陀羅尼経　宋施護

一名大光明、二名無量光、(大正21・872下)、

Ḥphags-pa rig-sṅags-kyi rgyal-mo sgrol-ma mchog-gi gzuṅs (The Tibetan Tripiṭaka, Peking Ed. Vol. 7, p. 162-2-5 (215a5)

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

byaṅ-chub-sems-dpaḥ ḥod-chen-po daṅ ḥod-dpag-med ces-bya-ba byaṅ-chub-sems-dpaḥ (大光菩薩と無量光菩薩)

※当該文の阿弥陀は異本、チベット訳でみる限りでは阿弥陀の意訳語の無量光であるが、他仏の脇待として説かれれる例は無いと思われる。従来の指摘の中で「阿弥陀」の語で他の仏菩薩名を示すことは珍らしいので参考として挙げる。

菩薩蔵経　梁僧伽婆羅

東方名阿輸訶世界(此謂無憂)、於彼有仏名月勝吉、南方難陀世界(此謂歓喜)、於彼有仏名旃檀吉　西方跋陀羅世界(此謂賢)、於彼有仏名無辺光明、北方饒益眼世界、於彼有仏名幢吉

大正24・1087上

cf. 矢吹表、傍説

最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経　唐地婆訶羅

阿嚕唎多

大正19・359中

cf. 説林巻三、傍説、矢吹表

※当該文の阿嚕唎多の原語がAmṛtaであることは容易に推定されるが、Amṛtaと阿弥陀仏の関係について藤田宏達博士は阿弥陀仏の起源問題を検討された際に〝Amṛtaが阿弥陀仏と関係づけて説かれる例が、他にないわけではない。〟(『原始浄土思想の研究』p.301)として数種の例を挙げられる。しかし、藤田博士の結論は阿弥陀仏の原語を〝Amṛtaに由来するものと見ることは出来ない〟(同)というものであり、従って阿嚕唎多の語はインド浄土教においては資料とならないものである。しかし、中国以降の浄土教においては、Amṛtaが阿弥陀仏と関係づけて説かれる例証がある点、Amṛta〈不死〉の語が〈無量寿〉、従って阿弥陀仏として考えられたことは予想されるわけであり、それが説林等において浄土経典と見做された理由であろう。尚、荻原雲来『荻原雲来文集』pp.226～227、参照。

無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法　唐金剛智

我今順瑜伽　金剛頂経説　　熾盛金剛部　西方念誦法
若有修行者　依此而頂受　　……、
応念而自至　帰命無量寿　　願以功徳力　速得超悉地

大正21・130上以下

観自在如意輪菩薩瑜伽法要　唐金剛智

遍照虚空界　無量光所出

大正20・214下

cf. 説林巻四

異本：　観自在菩薩如意輪瑜伽　唐不空

遍照虚空界　無量光所出(大正20・210中)、cf. 傍説

百千頌大集経地蔵菩薩請問法身讃　唐不空

若有相応顕此理　唯身以慧作分析
彼人生於浄蓮花　聞法所説無量寿

大正13・792下

cf. 説林巻六、傍説、矢吹表

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

尚、本経の一部を添付したといわれる疑経典『示所犯者瑜伽法鏡経』の相応個所には「若能聴此妙伽他　自身修行及得見 捨命生大蓮華中　諸仏説法而能見」(大正85・1416下)とあり、浄土思想は認められない。

蓮華部心念誦儀軌

無量寿

大正18・322中

※『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』不空訳の当該真言を悉曇文字で記したもの。

以上の経典の記述は、阿弥陀仏、極楽と類似の訳語から、かつて浄土思想と見做された経典である。すでに指摘した如く、中国仏教は漢訳経典を基礎として成立したものであり、浄土教の流行を背景とすれば、無量寿、無量光、阿蜜唎多等の言葉を阿弥陀仏と、安隠国、西方浄土を極楽と見做した人々があったとしても不思議では無い。これらの記述には〈浄土三部経〉を中心とする浄土思想の概念とは異質な点もあり、読み方から考えても異なる点も認められるのであるが、若しこれらが否定されるなら、われわれはすでに指摘されている浄土思想に言及する漢訳経典の中で原典の無い記述、就中その半数を超える密教経典について今一度精査する必要が起こるであろう。本項の意図としては漢訳経典を依りどころとして成立つ中国浄土教においては訳語の類似から浄土思想と見做された経典のあること、原典が無い為その原語が確定出来ない経典の中には恐らくそうした可能性も考えられることが認められれば良いわけである。

第三項　浄土思想と解釈された経典

木槵子経　失訳人今附東晋録

若欲滅煩悩障報障者、当貫木槵子、一百八、以常自随、若行若坐若臥、恒当至心無分散意、称仏陀達摩僧伽名、乃過一木槵子、如是漸次度木槵子、若十若二十若百若千、乃至百千万、若能満二十万遍、　身心不乱、　無諸諂曲者、捨命得生第三焔天。

大正17・726上

cf.『浄土論』巻上（大正47・89中)、『観念法門』(大正47・30上)、『万善同帰集』巻中(大正48・977下～978上)。『往生要集』巻下（大正84・76下～77上）外、日本浄土教典籍に多数引用されている。伊藤真徹「民間念仏信仰の系譜」(『印仏研』第15巻第２号）参照。

※念仏功徳の譬えとして、阿弥陀仏・極楽の語は出さないが、浄土教徒に重用された経典である。尚、『浄土論』所引の文章「如経説、若人念阿弥陀仏、得百万遍已去、決定得生極楽世界」は迦才の会通である（名畑応順『迦才浄土論の研究』本文篇p.38参照)。このことは、当然のことながら浄土教典籍の引証経典の中には自己の教義体系を組織化する場合にそれに適応するように経典の取意を以って改変して引用することを示している。そしてこの点は孫引として否定されるのではなく、その教義体系の独自な思想と留意すべきであろう。疑経典は正しくその典型であり、捏造と否定さるべきでなく、そこに大きな思想的特徴を見出すべきであろう。

文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経　梁曼陀羅仙

云何名一行三昧、……、善男子善女人欲入一行三昧、応処空閑捨諸乱意、不取相貌、繫心一仏、専称名字、随仏方所端身正向、能於一仏、念念相続、即是念中能見過去未来現在諸仏。

大正８・731上中　　cf. 第二章第一節第二項 pp.103-104.

大集経日蔵分　（大乗大方等日蔵経）　隋那連提耶舎

欲生清浄仏刹、不生障疑、……、而此衆生……於寂静処荘厳道場、正念結加、或行或坐、念仏身

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

相、無使乱心、更莫他縁、念其余事、或一日夜或七日夜、不作余業、至心念仏、乃至見仏、小念見小、大念見大、乃至無量念者見仏色身無量無辺……

大正13・285下

cf. 第二章第一節第二項 p. 104.

本項に挙げた浄土思想と見做された経典については、すでに前章第一節第二項(pp.103-104)でその意図を指摘したので再説しない。そこで触れなかった経典としては『地蔵十輪経』『華手経(花首経)』など（『釈浄土群疑論』巻七、大正47・73中。『長西録』『経籍録』、『大日本仏教全書』巻一 pp. 339、378参照）が考えられる。またすでに知られている浄土思想に言及する経典の中でも念仏三昧、他方往生に言及する経典（例えば『華厳経』の見仏三昧など）も当然配慮しなければならないことを附説するにとどめる。

第二節　中国撰述浄土教関係疑経典

本節並びに次節で取扱う経典は本稿の意図する主要経典であり、後述の研究を容易にするために下記の順序で記述する。

経典名　訳者（仮託された場合）

当該文章

出典、�原本

cf. S.＝Stein本、P.＝Pelliot本、北＝北京本、ただしP.本、北.本は『敦煌遺書総目索引』に依り必要に応じて挙げる。また、Giles.＝L. Giles:Descriptive Catalogue of the British Museum. London 1957, 芳村修基・土橋秀高・井ノ口泰淳「敦煌仏教史年表」(『西域文化研究』第一）を参看した。

異本、関係経典

① 経録：出＝出三蔵記集、法＝法経録、歴＝歴代三宝紀、仁＝仁寿録、静＝静泰録、内＝内典録、武＝武周録、開＝開元録、貞＝貞元録

奈良朝＝『奈良朝写経目録』

『長西録』、『経籍録』

② 引証典籍

③ 参考文献：望月発達＝望月信亨『浄土教の起原及発達』、望月仏教史＝同『仏教史の諸研究』、望月史論＝同『仏教経典成立史論』、鳴沙＝矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』、牧田論文＝牧田諦亮「中国における疑経研究序説」

④ 解説考証

記載の順序は、経録・写経年代、仮託された訳者、他経典との思想関係などにより、一応の目安で古い方から挙げたが、疑経典の性格上明確な査定はできない。

第一項　現存疑経典

1．浄土思想を主要とした経典

山海慧菩薩経（阿弥陀仏覚諸大衆観身経）

十往生経（十往生阿弥陀仏国経）

③ 佐藤成順・大南竜昇「十往生経の研究」(『三康文化研究所年報』第三号)

④ 阿弥陀仏国への十往生法を中心に構成されている上記広略二本の諸問題については前掲論文に詳説されているのでここでは取上げない。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

阿弥陀仏説呪

……那摩阿弭多婆夜……若能如法受持決定得生弥陀仏国

大正12・352上中

cf. S.363、1023、1910(col.開元八年四月八日)、2107、2112、2171、2175、4075、4930、5337、

② 『浄土五会念仏誦経観行儀』巻中　法照（大正85・1244上、㊟P.2066）

③ 井ノ口泰淳「敦煌本『阿弥陀経』について」（『宗教研究』第177号）

④ 本呪の真偽は定かでないが藤田博士〈一覧表〉には載せられていない。敦煌本では『阿弥陀経』に附載されており、井ノ口泰淳氏は「前掲論文」において、この陀羅尼を実沙難陀訳『甘露陀羅尼呪』の略抄か、逆に原始形という立論の上で開元八年の紀年を有するもの（S.1910）の関係からこの時期の実施を指摘され、更に『無量寿仏説往生浄土呪』、『抜一切業障根本得生浄土神呪』との関係から宋代の成立と結論される。

無量寿仏説往生浄土呪

南無阿弥多婆夜……

誦此呪者阿弥陀仏常住其項命終之後任運往生

大正12・348中　※脚註：已下依燉煌本載之とあるが、原本はS.317である。

cf.『阿弥陀仏説呪』、『抜一切業障根本得生浄土神呪』

念仏超脱輪迴捷径経

先誦仏讃

阿弥陀仏身金色　相好光明無等倫、……、……、……、……、

四十八願度衆生　九品咸令登彼岸

南無西方極楽世界大慈大悲阿弥陀仏

南無阿弥陀仏……、……、……、……、

念暈迴向発願頌

十方三世仏　阿弥陀第一　九品度衆生、……、……

南無阿弥陀仏三声　念暈合掌項礼而退。

卍続87・4

④ 本経についての解説、或いは経録等の指摘はない。

構成は、仏讃・念仏（南無西方……）・廻向発願頌・念仏となって、最後に「念暈合掌項礼而退」で終るから、経とはなっているが讃文と念誦法に属するものである。

ところが本経の仏讃、発願頌の一部は王日休撰『竜舒増広浄土文』巻十二附録に認められる。ここにそれを挙げると、

讃仏偈並回向発願文。共四篇事尽理到。皆先覚所撰。凡修浄業者随意互用。

阿弥陀仏真金色、……、九品咸令登彼岸（大正47・288上）

超脱輪迴捷径

……、大慈菩薩讃仏懺罪回向発願偈一遍。十方三世仏……如仏度一切。復項礼而退。(289中)

※この超脱輪迴捷径の内容は、同書巻四　修持法門一、二（261下～262上）と重複する。

とあり、超脱輪迴捷径の語は別に同書巻三　普勧修持四に「唯有西方浄土、最為超脱輪迴之捷径」(260中)、また呂元益の同序は「浄土之説乃超脱輪迴捷径」(251下）で始まっている。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

以上の様に本経は『竜舒浄土文』に認められる讃文、発願頌が後に別行され、更にそれとゆかりある〈超脱輪迴捷径〉の語が経題としてつけられて、経典となったのであろう。

無名の後文には、日課として此の念誦を勧めており、その中には袾宏について述べているので、本文が同時代に経とされたのであるなら、明代以降の成立である。後文の文体に、……的、那裏没有等の口語が使われていることも、その成立の新しいことを示している。

極楽願文　達喇嘛嘎ト楚薩木丹達爾吉訳

世尊無量寿仏前敬礼

釈迦牟尼歴次中　善所称讃之勝境

往生極楽願文詞　由慈悲故盡力説

……

大正19・80中以下　㊟清道光四年刊

④　敦煌文献には願文、讃文は多数あり、阿弥陀仏、極楽に関する願文、讃文も多い（第二章第一節第一項p.101参照）。ここに取上げた願文も敦煌文献のそれらと同等に扱われるべきであるが、大正蔵所収清代訳出故にとくに摘出した。

大正蔵所収経の中、清代訳出は七部（工布査布訳三部、阿旺扎什訳二部、極楽願文　達喇嘛嘎ト楚薩木丹達爾吉訳、釈迦仏讃　達喇嘛薩穆丹達爾吉訳）と思われるが、四人の訳出者については、工布査布、阿旺扎什は経序、経後記で多少の事情が判明しても梵本からの訳というわけではない（小野玄妙「経典伝訳史」『仏書解説大辞典』巻12 pp.196～197）。後の二人は名前から推してラマ僧であろうから西蔵所伝の訳経と思われるが、伝歴は全く不明である。しかしいずれも梵本からの訳出かどうか疑わしい。

2．一部に浄土思想の認められる疑経典

灌頂百結神王護身呪経　（灌頂経巻四）　東晋帛尸梨蜜多羅

若命終時是八大菩薩、迎其精神、往生西方自在随意。

大正21・507下

①　出4、歴7、内3、開3、cf．『随願往生経』の項

『長西録』『経籍録』

③　望月発達 pp.209～222、望月仏教史 pp.118～122、望月史論 pp.353、409

④　本経の異本として『八吉祥神呪経』呉支謙、『八陽神呪経』竺法護訳があるが、いずれも東方世界の八菩薩の記述であり、西方往生を記すのは本経のみであるから恐らく此の個所は改変部分であろう。『長西録』『経籍録』が浄土経典として挙げるのは当該文を示すのかも知れない。

灌頂随願往生十方浄土経　（灌頂経巻十一、普広経）

普広又白仏言、世尊何故経中讃歎阿弥陀刹……、諸願生者、皆悉随彼心中所欲応念而至。仏告普広菩薩摩訶薩、汝不解我意、娑婆世界人多貪濁、信向者少習邪者多、……、是故讃歎彼国土耳。諸往生者悉随彼願無不獲果。

大正21・529下

cf．S.2381、6801　なお『灌頂経』はS.1553、2515、6800 etc.

①　出4、法2、歴7、13、仁4、内3、開16、20、貞26、28

『灌頂経』出5、法4、歴7、仁4、静1、4、内3、武13、開3、19、貞5

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

奈良朝 No.1662、『灌頂経』No.1656、1657

『長西録』『経籍録』『真宗教典志』

② 『安楽集』巻上、『浄土論』巻中、『天台十疑論』、『阿弥陀経疏』基(?)、『正観記』巻上、『楽邦文類』巻一

『往生要集』巻一、『説林』巻一、など多数、 cf. 矢吹表、藤田表 No.53、

③ 望月発達 pp.209～222、望月史論 pp.416～424、牧田論文 pp.344、392

④ 本経で説く十方浄土への往生と西方浄土への往生との関係は、『文殊般若経』の一行三昧の記述と同様に、他方仏土への往生が浄土思想の盛行に従ってことごとく西方浄土往生に帰結するよう解釈されたことを意味している。本経の説く内容はあくまでも「十方浄土無差別」であるが、後の浄土教徒にとっては〝信に向う者少なく、邪を習う者多い娑婆の人々の故に〟という記述が、浄土教の人間観、社会観と一致して有力な典拠となっている。

藤田表には「帛尸梨蜜多羅(?)」として載せられているが経録、諸先学の指摘するように疑経典と見做すべきであろう。

灌頂抜除過罪生死得度経 (灌頂経巻十二、灌頂章句抜除過罪得度経)

此薬師琉璃光如来国土清浄、……如西方無量寿国無有異也。

仏言、若四輩弟子比丘比丘尼清信士清信女、……、願欲往生西方阿弥陀仏国者、憶念昼夜若一日二日三日四日五日六日七日、或復中悔、聞我説是薬師瑠璃光仏本願功徳、盡其寿命欲終之日、有八菩薩、其名曰文殊師利菩薩、観世音菩薩、……、弥勒菩薩、是八菩薩皆当飛往迎其精神、不経八難生蓮華中、……。

大正21・533上、中下

cf. S.1968、2494 etc. P.4826

異本:『薬師如来本願経』隋達摩笈多訳(大正14・402上、下)、『薬師琉璃光如来本願功徳経』唐玄奘訳(大正14・405下、406中)、『薬師琉璃光七仏本願功徳経』唐義浄訳(大正14・411下、413下、414中)、Bhaiṣajyaguruvaiḍūryaprabharāja-sūtra, ed. N. Dutt: Gilgit MSS., Vol. I (Skt. Text, p.14)

① 出5、法1、歴10、仁1、静2、内10、開16、20、貞26、cf.『随願往生経』の項

③ 望月仏教史 pp.120～122、望月史論 pp.409～416、真田有美「梵本薬師経に就いて」(『竜大論集』No.339)、牧田論文 pp.342、346

④ 異本、梵本の対照では、西方往生、八菩薩の臨終来迎(但し、菩薩名を挙げるのは本経のみ)は相応するが「憶念昼夜若一日、……七日、或復中悔」は無く、恐らく『阿弥陀経』の影響による挿入であろう。なお経録、諸本対照については真田有美前掲論文参照。

観世音三昧経

観世音三昧経を専念読誦すること七日、観世音菩薩が現われて、行人をして西方無量寿国を見せしめる。

牧田論文 pp.353、379～382、(原)京都博物館蔵守屋本 cf. S.4338、北日62、余80

④ 本経についての内容、経録等の記述は牧田論文参照。 S.4338は首欠、当該文を欠いている(Giles. No.5382、probably of 7C.)。守屋本(『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』本経解題 pp.13～14〝天平四年〔732年〕大日本古文書巻一、完全な写経〟)は披見できなかった。牧田博士は撰述年時を五世紀

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

後半とされる。

護身命経　（救護身命経済人疾病苦厄）

将来往生無量寿国即生蓮華、……智慧勇健如上輩者。

大正85・1326上、㊊P. 2340　cf. S. 2467

① 出4、法4、歴14、仁4、静4、内3、10、武7、14、開18、20、貞5、28、奈良朝No. 1768、1769.

③ 鳴沙Ⅱ, p. 227、牧田論文 p. 353

④ 大正蔵85巻所収No. 2866中村不折氏蔵本『護身命経』（奥書、正光二年521年）には認められない。

救疾経

日日礼無量寿仏。

大正85・1362下　㊊S. 2467　cf. S. 1198、1978、6285、P. 4563

① 法4、仁4、静4、内10、武15、開18、貞28

③ 鳴沙Ⅰ, p. 188、Ⅱ, pp. 194～197

観　経

無量寿仏観、……即於光中観阿弥陀仏、……凡有善事無皆迴向願生無量仏国也。

大正85・1461上～下、㊊S. 2585

③ 鳴沙Ⅰ, p. 183

④ 『思惟略要法』羅什訳、『五門禅経要用法』曇摩蜜多訳等より諸々の観法を集めたもので所謂通常の経典では無い。『観無量寿経』をはじめ諸々の観仏経典、禅観経典が訳出され、禅観の実践が強調された宋元嘉年間（424～453年）以降の撰述であろう。

普賢菩薩説証明経

往昔過去七十七億諸仏所説陀羅尼神呪、…… 南無阿弥陀仏、

大正85・1363下　㊊P. 1286、㊥P. 2136、㊁S. 1552

西方無量寿仏弟子大慈観世音、此大菩薩与閻浮履地拯済有縁。

1365上

復欲受終時、託生無量寿、自然蓮華生。

1368上

① 法2、仁4、内10、武15、開18、貞28

③ 鳴沙Ⅱ, pp. 207～213

太子讃　釈迦牟尼仏和

……、北行見真僧……常念弥陀転法輪　救度世間人……

（無常堪嗟嘆　願生九品坐蓮華台　礼如来和、……、分明〇引経云教　浄土好　論情只是勝娑婆有弥陀　直須早作行呈路……　十勧鉢禅篇　弥陀仏和）

S. 2204　大正蔵未収

① 法4、仁4、静4、内10、武15、開18、貞28

③ 鳴沙Ⅰ, pp. 285～286、Ⅱ, p. 226～227

④ 当写本の構成は、薫永変文、太子讃、父母恩重讃、十勧鉢禅篇（『敦煌遺書総目索引』参照）

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

となっている。当該文は仏伝で伝える〈四門出遊〉の一部である。

Gilesは、IV. Secular Texts、4. Poems, Songs, and Ballads（四. 古籍部、4．詩、歌、民謡）No.7179に査定している(Giles. p. 236)。ここでは矢吹博士の査定に従って挙げるが、構成からみて讃文に入れるべきであろう。

大通方広懺悔滅罪荘厳成仏経

巻上 ㊊日本大蔵経、校者曰原本以松本文三郎氏蔵敦煌本為底本。

当敬礼阿弥陀仏

大正85・1341中

南無定光仏、南無光遠仏、南無月光仏、……、南無処世仏、南無自在仏、〔以上『無量寿経』過去五十三仏〕、南無無量寿仏、南無無量光仏、南無無辺光仏、……、南無無称光仏、南無超日月光仏、〔以上『無量寿経』十二光仏〕、南無相好紫金仏、南無遠照仏、南無宝蔵仏、……、南無無上華仏、南無無畏力王仏、〔以上『無量寿経』十三仏国土仏名〕、

大正85・1341下～1342上

南無阿弥陀仏、……、南無普賢菩薩、南無妙徳菩薩、……、南無解脱菩薩、南無法蔵菩薩、……

1343上、下

巻下 ㊊知恩院蔵写本、㊥S. 1847.

稽首西方阿弥陀仏

1350中

十方仏土中 一切菩薩衆 往生無量寿 皆由恭敬礼 十方三世仏

1354下

cf. S. 99、184、1847、4553(603年)、6382

① 法2、歴13、仁4、内10、武15、開18、貞28

奈良朝No. 1778、1780

③ 鳴沙Ⅰ, p. 187. Ⅱ, pp. 230～237. 牧田論文pp. 376～379.

④ 本経は仏名経の一種（井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経」の諸系統」『東方学報』京都 第35冊参照）であるが、上記引文の中『無量寿経』過去仏、十二光仏、十三仏国土の仏名はその文字・順序は全く魏訳（？）と同じであり、その転用である。このことは第1に『無量寿経』の当時の流行を示す例証であり、第2に無量寿仏の異名として説かれる十二光仏が別仏と考えられた一例である。尚〈無量寿経〉諸異本の仏名については、拙稿「無量寿経過去仏名について」(『札幌大谷短大紀要』第2号)、「無量寿経十二光仏について」(『印仏研』第15巻第2号)、また『仏名経』(三十巻本）の項参照。

牧田博士は、S. 4553の願文（命過已後、託生西方無量寿国）を挙げて、本経書写によって託生無量寿国の因、と指摘され、また本経の撰述年時を六世紀中葉以後とされる。

現在十方千五百仏名並雑仏同号

次有六方三十八仏、出阿弥陀讃一切諸仏所持之法経

復次舎利弗、東方有仏名、阿閦如来……、西方有仏名、無量寿如来、……

……至心願生阿弥陀仏国、若過去発願、若今発願、欲得往生阿弥陀仏国者、此輩衆生、必当得住不退転地、此等命終、皆当往生阿弥陀仏国、

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

又舎利弗、若善男子善女人、欲得往生阿弥陀仏国者、常当至心念阿弥陀仏及上六方諸仏名、一心敬礼莫令断絶。

次有五方、従東方至上方、有一百三十九仏、出在称揚諸仏功徳経

……

次西方十五仏、阿弥陀如来……

大正85・1447中～1448中、 ㊊S. 2180

cf. S. 6761

③ 鳴沙Ⅰ, p. 198～201、202～203、拙稿「浄土教関係敦煌写経に関する二、三の問題」(『宗教研究』第218号)

④ 本経の構成は、『薬王薬上経』(大正20・663下、『三劫三千仏縁起』大正14・364下～365上)、『決定毘尼経』(大正12・38下～39上)、上記『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』、『称揚諸仏功徳経』(大正14・87上～104上) からの仏名と、その後に「十方各有」の「同号仏名」を載せて成り立っている。

その典拠となる四経の中、『薬王薬上経』の五十三仏、『決定毘尼経』の三十五仏は現存経典の通りであり、また三階教の礼仏誦法である〈七階仏名〉に含まれていることはすでに矢吹慶輝博士によって指摘されている(『三階教之研究』pp. 512～536)。『称揚諸仏功徳経』については現存経典に認められる仏名に関する限り文字の相違(たとえば火→大、方→力、論→輪など)を除いて正確である。ただし、本経所出の仏名には現存『称揚諸仏功徳経』に認められない、従って増広された仏名もあり、尚検討の余地が残されている。

ところが『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』には種々論考すべき点が多い。

当該仏名が『阿弥陀経』〈六方段〉の異名であることは、すでに矢吹慶輝博士によって指摘されているが、博士はこの点について〝現存、秦唐の二訳並に梵本と符合せず。…、一異文として之を掲ぐ。……。小経に異文の伝ある久し。本経も亦その一種とすべきか (鳴沙Ⅰ. pp. 198～201)〟と仏名並びに羅什訳、玄奘訳を挙げながらも疑問を残されている。しかし、そこには、〝梵本と符合せず〟と云われながら、その対照をされていないし、筆者は博士と所見を異にするので当該仏名と『阿弥陀経』梵漢仏名の対照を挙げる。

『阿弥陀経』〈六方段〉対照表

『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』	Sukh. (梵蔵和英合壁浄土三部経pp. 204～206)	羅什訳 (大正12・347中～348上)	玄奘訳 (大正12・350上～下)	cf.『現在十方千五百仏名並雑仏同号』所出『称揚諸仏功徳経』(大正85・1448上中)	『十方千五百仏名経』(大正14・312中～318上)
〈東〉阿 閦	Akṣobhya	阿閦鞞	不 動		
須弥幡	Merudhvaja	須弥相	山 幢		
大須弥	Mahāmeru	大須弥	大 山		
須弥光	Meruprabhāsa	須弥光	山 光		
哀 楽	Mañjudhvaja	妙 音	妙 幢		
〈南〉日月燈明	Candrasūryapradīpa	日月燈	日月光	日月燈明	日月燈明
光明名号	Yaśaḥprabha	名聞光	名称光		名聞光
大火炎種	Mahārciskandha	大焔肩	大光蘊		火炎肩
須弥鐙	Merupradīpa	須弥燈	迷盧光		須弥燈

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

無量精進	Anantavīrya	無量精進	無辺精進		無量精進
〈西〉無量寿	Amitāyus	無量寿	無量寿	阿弥陀	
無量幢	Amitaskandha	無量相	無量蘊 無量光	無量幢	無量幢幡
無量幡	Amitadhvaja	無量幢	無量幢 大自在	無量幡	無量幢
大光	Mahāprabha	大光	大光		
大光普遍		大明	光焔	大光普遍	大光普遍
宝幢	Mahāratnaketu	宝相	大宝幢	宝幢	宝幢
浄光	Suddharaśmiprabha	浄光	放光	浄光	浄光
〈北〉大火炎種	Mahārciskandha	焔肩	無量光厳 通達覚慧		炎肩
喜楽音	Vaiśvānaranirghoṣa Dundubhisvaranirghoṣa	最勝音	無量天鼓 震大妙音		最勝音
莫能勝	Duṣpradharṣa	難沮	大蘊		難沮
従日興起	Ādityasaṁbhava	日生			日生
宝網光明	Jaleniprabha	網明	光網		網明
	Prabhākara		娑羅帝王 示現一切妙法正理、常放火王勝徳光明		
〈下〉師子	Siṁha	師子	師子	師子	師子、師子
名称遠聞	Yaśas	名聞	名称	名称遠聞	名聞、名称遠聞
名声光明	Yaśaḥprabhāsa	名光	誉光		普光
法名号	Dharma	達摩	正法	法名号	遠摩、法名号
法幡	Dharmadhara	法幢	妙法	法幡	法憶、奉法
奉法	Dharmadhvaja	持法	法幢 功徳友 功徳号	奉法	持法、法幢
〈上〉梵音	Brahmaghoṣa	梵音	梵音		梵音
最香	Nakṣatrarāja	宿王	宿王		宿王
	Indraketudhvajarāja				
星王	Gandhottama	香上			香上
香光明	Gandhaprabhāsa	香光	香光		香光
大火炎種	Mahārciskandha	大焔肩			大炎肩
異宝雑色華身	Ratnakusumasaṁpuṣpitagātra	雑色宝華厳身			娑羅樹王
妙香樹王	Sālendrarāja	娑羅樹王			雑色宝華厳身
宝蓮華	Ratnotpalaśrī	宝華徳	如紅蓮華勝徳		宝華徳
教授一切諸事	Sarvārthadarśa	見一切義	示現一切義利		見一切義
須弥意	Sumerukalpa	如須弥山			如須弥山

以上の対照表をみると、矢吹博士が指摘されたように『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』の仏

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

名と羅什訳・玄奘訳の仏名と訳語が符合しない点は認められるが、しかし、梵本からの訳語と考えればそれ程の差異は認められず、全く出鱈目の訳語とは思えない。この点では矢吹博士と所見を異にする。

また、本経の仏名は『称揚諸仏功徳経』の増広仏名並びに『十方千五百仏名経』の仏名と密接な関係を有することが判明する。(この中『十方千五百仏名経』には対照表で知られるように羅什訳『阿弥陀経』の仏名が転用されていることはすでに指摘されている。禿氏祐祥「敦煌遺文と仏名経」『西域文化研究』第一。従って本経も明らかな偽経として別出すべきであろうが煩を避けて取挙げない。)

以上『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』の仏名について整理すると、第一は『現在十方千五百仏名並同仏同号』所引の四経の中、他の三経は現存経典と比較すると殆んど正確に写されており、このことは本経の仏名も殆んど正確に何らかの経典から写されたと推定されること。第二は確かに羅什訳・玄奘訳と訳語は異なるが梵本とは良く相当し、このことは〈六方段〉の仏名に関する何らかの経典が予想されること。第三は、『称揚諸仏功徳経』増広仏名、並びに明らかな偽経『十方千五百仏名経』に転用されていることは或る程度本経の仏名が知られており、第一の点を考え合わせると両経とも本経からでは無く何らかの経典から転用したと考えられること、が結論づけられる。そしてこの三点に共通することは『阿弥陀経』〈六方段〉についての新たな資料が存在したという点である。

そこで『阿弥陀経』〈六方段〉に関係する従来の問題を探ぐると、第一は『阿弥陀経』漢訳二存一欠の欠本経、求那跋陀羅訳『小無量寿経』(坪井俊映『浄土三部経概説』pp. 503～505参照)が本当に訳出されたかどうかの正否(藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 110～113)、第二は〈六方段〉の西方無量寿仏の記述、即ち阿弥陀仏を主仏として構成されている『阿弥陀経』の中で西方無量寿仏が自からを讃嘆するという構成上の矛盾がある。この中、第二の問題についてはすでに藤田博士が、阿弥陀経の後半の六方段は〝仏名経類〟から素材を得て、これを拡大して説いたもの(藤田博士前掲書 pp. 216～221)という説で解決がなされている。

そこでこの二つの問題と本経の仏名との関係を考えると、第一の求那跋陀羅訳『小無量寿経』が、かつて現存していたとするならば、もとより本経の仏名を相当させることは容易である。しかしながら、その存否が確定できない現状ではそう決定するのは早計であろう。ただ、本経の仏名がこの問題についての一つの手掛かりになることは云えるであろう。第二の藤田博士の指摘された〈六方段〉と仏名経類との関係については、インドにおける『阿弥陀経』の原型の問題であり、本経の仏名とは抵触しない。因みに本経の仏名は現存『仏名経』十二巻本、三十巻本には全く認められない。そしてこのことは『仏名経』からの転用ではなく、何らかの経典からの転用を意味している。ただ、藤田博士が指摘された〈六方段〉の仏名と『仏名経』の仏名との同一原本(梵本)からの所伝、という点からの推定として、本経の訳語は『仏名経』の原典から何人かによって別に訳出されたのでは無いかということが考えられる。若しそういう事実が実証され、求那跋陀羅訳『小無量寿経』の訳出が経録のみによるとされたなら本経の仏名についての解決になるが、これのみでは決め難く、更に検討を続けていきたい。

ところで本経と同じ仏名が S. 6761 に見出せる。そこでその敦煌仏名経について考えると、この仏名経はジャイルズによると〝No. 4691. nos. 1641～2526. Ends mtd., damaged in parts.

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

Very good MS. Yellow paper. 31ft. S. 6761.〟(Giles. p. 138, なお『敦煌遺書総目索引』では「仏名経擬」) とあるが、その前後の仏名経をみてもいずれも相応しない。また井ノ口泰淳氏によると〝「十八巻仏名経」巻四〟(「敦煌本「仏名経」の諸系統」『東方学報』京都 第35冊) に査定されたものであるが、そこで査定された同種の写本 (S. 1628、S. 240、金28、裳17) も私のみた限り一致しない。従って当写本の正確な査定は未だ明確ではないが、その構成をみると十八巻仏名経の特徴 (南無十二部経般若海蔵・諸経列記など) を備えており、その仏名の中には『無量寿経』説法会の諸菩薩、十三仏国土の仏名、『法華経』巻一説法会の諸菩薩、巻三の諸仏の名も認められるから十八巻仏名経に類する明らかな偽経である。そしてこの写本は十二巻『仏名経』から十六巻・十八巻、或いは三十巻『仏名経』と様々に増広されていった過程の中でその原型から存在したのではなく、恐らく当該仏名も何らかの典拠からの転用ということを意味している。そしてそれを『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』と言われていた経典とすることには無理がないであろう。

以上『阿弥陀讃一切諸仏所持之法経』についての諸問題について論考した。種々の点から、『阿弥陀経』〈六方段〉の異訳仏名として新たな典拠を示唆しているように思えるが、また難点も認められる。これらの問題については更に北京本等の再検索を続け、『阿弥陀経』に関する従来の諸説を再考し、別に発表することにしたい。

補注 この問題については、昭和49年度『日本印度学仏教学会』において発表予定。

仏名経 (三十巻本)

巻十四

南無尊者了本際、南無尊者正願、……正語、……、南無尊者牛王、

大正14・239中

巻十五

南無百億定光仏、南無光遠仏、……月光仏、……、南無無上瑠離光仏、

243下

南無尊者満願子、……離障、……、……羅云、

244中

巻十八

南無法蔵仏、南無最上首仏、……菩薩華仏、……、……処世仏、南無自在仏、南無無量寿仏、南無無量光仏、……無辺光仏、……、……無称光仏、南無超日月光仏、南無相好紫金仏、南無遠照仏、南無宝蔵仏、南無無量音仏、

258上中

巻二十一

南無甘露味仏、……龍勝仏、……勝力仏、南無师子音仏、

271中

③ 井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経」の諸系統」(『東方学報』京都 第35冊)

④ 三十巻本増広部からの摘出である。いずれも『無量寿経』所説の〈尊者〉、〈過去仏〉、〈十二光仏〉、〈十三仏国土の仏〉の名称 (大正十二・265下、266下〜267上、270上中、278下) である。他経典からの引用 (たとえば『法華経』の諸仏、大正14・264上、293下など) も認められるが

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

一々挙げない。

藤田博士の指摘する十二巻『仏名経』の浄土思想の中、巻七　阿弥陀仏（大正14・149中）は欠いているが、他はすべて相応する。

〈仏名経〉諸本の研究としては井ノ口泰淳前掲論文が秀れているが、〈浄土三部経〉所説の仏名との関係については別に発表する予定である。従って〈仏名経〉に属する明らかな疑経典（たとえば、『十方千五百仏名経』大正14・312上以下、S.6761、cf.『現在十方千五百仏名並同仏雑号』）についてもとくに重要なものを除いてここでは列記しない。

本経が現行の形になったのは恐らく後代のことと思われるが、『大通方広経』『現在十方千五百仏名並雑仏同号』との関係からここに挙げた。浄土思想の記述に限って云えば不自然でないと思われる。

究竟大悲経　巻二

寧神泯是非　現居安楽国

大正85・1372上、　㊊S.2224

cf.　S.4352、北3部

①　内10、開18、貞28

③　鳴沙Ⅰ.p.191、Ⅱ.pp.249～253、鎌田茂雄「究竟大悲経について」（『印仏研』第12巻第2号）。

高王観世音経

南無……、……、※弥陀仏、……

大正85・1425中、㊊大日本続蔵経、㊥光武二年刊本。※㊥阿弥陀仏。

cf.　P.3920

①　内10、武7、14、15、開18、20、貞28

奈良朝No.1763

②　cf.　清智敬『高王観音経註釈』

③　牧田論文 pp.38

④　続蔵所収には、経の前後に諸呪（浄身呪、浄口呪、安土地呪、消万病呪、七仏滅罪呪、解冤結真言、仏母準提神呪、往生呪）、開経偈と誦経感応が記されている。

本経製作の由来は牧田論文参照。

続命経

西方阿弥陀仏観世音菩薩得大勢至菩薩、有能誦此一仏二菩薩名者、離生死苦永不入地獄、恒値善諸（＝智？）識。

大正85・1405上、　㊊S.1215

cf.　3795、5531、5535、5581、5618、5679、col.顕徳六年（959年）p.2374

①　武15、開18、貞28

③　鳴沙Ⅱ.p.269～272、牧田論文 p.366

④　矢吹博士は『薬师経』の影響と弥陀弥勒併信を指摘。

無量大慈教経

若有善男子善女人等、於此経中生清浄信者、受持読誦昼夜奉持修行、此人過去之時、定生西方極楽世界。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

若有衆生念阿弥陀仏国者、一断酒肉、二断五辛、三断殺生、四断邪行。
若有衆生楽生西方国者、縁我身及向我口眼中不浄我亦不辞。

S.6961

cf. S.110、1627（大正蔵底本）、1018、4308、4553

① （慈教経？）武15、開18、貞28

③ 鳴沙Ⅰ.p.193、Ⅱ.279～282

④ 上記S.本の中、1018、4308、4553はGiles. Unidentfied fragments of apocryphal sūtras No.5479、5482、5484、『敦煌遺書総目索引』〈仏経〉とされていたが、浄土思想の記述により本経の断片と判明した。

また、大正蔵底本S.1627は首欠、「若有衆生※薬生西方国者……」（大正85・1445上※薬→楽）のみであり、適当でない。

大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経 唐般刺蜜帝

巻五

大勢至法王子与其同倫五十二菩薩即従座起、頂礼仏足而白仏言、我憶往昔恒河沙劫、有仏出世名無量光、十二如来相継一劫、其最後仏名超日月光、彼仏教我念仏三昧、……、若衆生心憶仏念仏、現前当来必定見仏、去仏不遠、……、我本因地、以念仏心入無生忍、今於此界摂念仏人帰於浄土、……

大正19・128上中

巻七

釈迦弥勒阿閦弥陀
阿弥陀婆耶無量寿仏
阿弥陀婆耶

133中、134上、139中

cf. S.314、5177etc.

① 『続古今訳経図紀』（大正55・371下～372上）、開9、17、貞14
奈良朝No.1638

② 『念仏三昧宝王論』巻下、『浄土指帰集』巻下
『説林』巻四、cf. 矢吹表、藤田表No.185

③ 望月発達 pp.229～244、望月史論 pp.493～509

④ 本経の問題点は第一に望月博士の指摘する疑偽経の正否、第二に十二如来の記述である。

望月博士は経録記載の矛盾、日本における真偽論議、教理に認められる『首楞厳三昧経』『起信論』『菩薩瓔珞経』『瑜伽師地論』『法華経普門品』、道教思想等の影響から、700～730年頃の成立とされる。

十二如来の記述については『説林』では明らかに浄土思想と見做して挙げているが、矢吹・藤田両博士の表では当該文が無い為明らかでない。大祐は『無量寿経』十二光仏と本経の当該文を挙げた後に「謬矣、雖理體無別而事相不同……、不原経意、不分今昔異同、何模稜之甚哉」（卍続2・13・1、p.86）とする。本経に現われる十二如来は、最初の無量光仏と最後仏の超

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

日月光仏とが『無量寿経』十二光仏と一致する。この中、無量光仏は諸経にしばしば認められるAmitābhaの訳語であるからそれのみで真偽は定めれないが、超日月光仏は『無量寿経』のみの抄訳語（Abhibhūyacandrasūryajihmīkaraṇaprabha, Sukh. ed. par A. Ashikaga, p. 27ℓ. 21）であり、『仏名経』増広部分を除いて他には認められないから『無量寿経』の転用と考えられる。拙稿「無量寿経十二光仏について」（『印仏研』第15巻第2号）参照。

三厨経　西国婆羅門達多羅及闍那崛多等奉詔訳

猶如阿弥陀仏無量寿国等無有異也。

大正85・1413下、㊊S. 2673

恒念阿弥陀仏、至一年必得見仏、決定無疑。

1414上

cf. S. 2680、P. 3032

① 開18、貞28

② 『集諸経礼懺儀』唐智昇撰（大正47・465下）

③ 鳴沙Ⅰ. p. 195、Ⅱ. pp. 300～304、牧田諦亮「仏説三厨経について」（『宗教研究』第174号）、牧田論文 p. 353

勤善経

毎日念阿弥陀仏一千口

相勧阿弥陀仏、不久見太平時

大正85・1462上、㊊S. 417

cf. S. 912、1349、4923etc.　col. 貞元九年（793年）4部、貞元十九年（803年）11部、天福三年（938年）P. 3036

③ 鳴沙Ⅰ. p. 196、Ⅱ. pp. 315～317、牧田論文 pp. 365、387、395

新菩薩経

A. 毎日念阿弥陀仏一千口

大正85・1462上、㊊S. 136

B. ……大小念百万口、阿弥陀仏五百身中……

大正85・1462中、㊊S. 622（長安四年 704年）、

cf. 407、414、470etc.『勧善経』の項

地蔵菩薩経

若有善男子善女人、造地蔵菩薩像、写地蔵菩薩経、及念地蔵菩薩名、此人定得往生西方極楽世界。

若有人造地蔵菩薩像、……、此人定得往生西方極楽世界。此人捨命之日、地蔵菩薩親自来迎。

大正85・1455下、㊊S. 197

cf. 2247、5531、5535etc. 谷三七（727年）

③ 矢吹慶輝『三階教之研究』pp. 638～658、鳴沙Ⅱ. p. 311

④ 〈地蔵経典〉には浄土思想が認められないから二仏併信の顕著な例である。

救苦観世音経

法義兄弟勤誦経　無量寿国金銀城

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

……

法義兄弟願往生　得生彼国快安寧

S. 4456

③ 牧田論文 p. 382

大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品

誰発普賢此行願　是即捨離諸悪趣

亦名遠離諸悪友　是人速見阿弥陀

……　……

我若臨欲命終時　除遣一切諸蓋障

現前親覩弥陀尊　速往遊於極楽国

……　……

極楽殊麗仏道場　生彼勝妙蓮華中

親於最善弥陀前　願我於中得授記

大正85・1455上中、㊊S. 2384

cf. S. 709

『普賢行願讃』不空訳（大正10・881上中）、『文殊師利発願経』仏陀跋陀羅訳（大正10・879下）、『大方広仏華厳経』(大正10・848上中)、

Gaṇḍavyūha-sūtra, ed. D. T. Suzuki and H. Idzumi, Kyoto, 1934-36, New Revised Ed. 1949 (pp. 547～548)

③ 鳴沙Ⅰ. p. 197

④ 『普賢行願讃』等の関連経典と対照すると偈文の順序等は不空訳に近いから、恐らくそれ以降の成立であろう。

普賢菩薩行願王経

若人発此普賢願　此乃遠離諸悪趣

又以棄絶諸悪友　是人速見阿弥陀

……　……

若我当於命終時　遍蠲除一切諸覆障

目所親覩弥陀己　遊彼極楽刹土中

……　……

秀麗極楽仏道場　生於上妙蓮花上

親向弥陀世尊所　願我於此得授記

大正85・1453下―1454上、㊊S. 2361

cf. S. 275、1487 (Giles. No. 4382, Unidentified Works, Sūtras)

青頸観自在菩薩心陀羅尼経　唐不空注

次当説此青頸観自在菩薩画像法

其像三面当前正面作慈悲熙怡貌、右辺作師子面、左辺作猪面、首戴宝冠、冠中有化無量寿仏。又有四臂、……

大正20・490中、㊊享保年間刊豊山大学蔵本

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

④ 不空訳経中、110 部は『貞元録』に明記されているが、それ以外に『大正蔵』には63部程収められている。その中17部は空海等の将来録に認められるが、その他は経録、将来録に載らない経典である。その中には浄土思想に言及する明らかな疑経典『九品往生陀羅尼経』も含まれるのであり、本経の真偽は定め難い(小野玄妙『仏教経典総論』〈『仏書解説大辞典』第12巻、pp. 169～170、175～179〉参照)。

そこで本経の構成、思想内容を検討すると、本経の構成は初めに青頸観自在菩薩陀羅尼の由来を短文で述べ、その真言を「不空奉詔注釈義」という細註を加えて記し、画像法、青頸印で終っている。これを異本(『金剛頂瑜伽青頸大悲王観自在念誦儀軌』唐金剛智訳、『観自在菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼』高麗指空校、『大慈大悲救苦観世音自在王菩薩広大円満無礙自在青頸大悲心陀羅尼』唐不空訳、cf. Ḥphags-pa nī-la-kaṇ-ṭha shes-bya-baḥi gzuṅs. The Tibetan Tripiṭaka, Peking Ed. Vol. 8, 141-2-3, 37b^{3}-39a^{1}) と対照すると、初めの短文と画像法は相応しない。従って経録・将来録に無い本経の、しかも画像法の記述は新たに附加されたのでは無いかという疑問が生ずる。次に青頸観自在菩薩の記述と冠中の化無量寿仏の表現を他の密教経典から検索すると、青頸観自在菩薩については異本の他に『不空羂索神変真言経』唐菩提流志訳(大正20・246下、271上)、『頂輪王大曼荼羅灌頂儀軌』唐瑢弘集(大正19・328中)、宝冠中の無量寿仏については『不空羂索神変真言経』(大正20・232中、332下、345上)、『葉衣観自在菩薩経』唐不空訳(大正20・448上)、その他(大正20・410下、415中、422中、428上など)に認められるが、明らかな関係は見出せない。従って両記述を載せる『不空羂索神変真言経』に多少の類以性が考えられる程度である。

本経の当該文は後に〈青頸観音法〉の典拠(『覚禅鈔』〈『大日本仏教全書』巻四七、p. 304〉)になるが、この個所に限っては真偽未詳と思われる。

金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法　唐金剛智訳

先以五輪著地、頂礼本尊観自在王如来、次礼北方不空成就如来(観自在王如来即弥陀観音合成身)、乃至無動宝生遍照如来。

大正19・75上には細字無し。説林巻六(p. 164)に依る。

阿密嘧覩

無量光

76下、77上

② 『説林』巻六、cf. 矢吹表は阿密嘧覩のみ。

④ 最初の細字は継成の理解であるが、本経の記述は金剛界曼拏羅の五仏(大日、阿閦、宝生、無量寿、不空成就)を背景としている故、このように理解したと思われる。同じ解釈は望月博士(史論 p. 521)にも認められる。なお〝浄厳師は偽作とする。〟(『仏書解説大辞典』第三巻〈本経〉の項)とあるが典拠に当れなかった。経録・将来録に認められないので摘出したが、浄土思想と見做された経典に含めても良い経典である。『大乗瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』の項参照。

大乗瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経　唐不空

巻一

四者牟尼世尊説入左字観本浄妙行義、是観自在王如来説為往昔千百億降伏瞋根、無量寿無忍自在

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

仏説、是仏成道時、此仏因地作菩薩時、如来与説左字観、修入妙観理趣浄土門。

大正20・726上

巻三

西方無量寿世界

735中

巻四

西方無量寿世界

観極楽浄土……、同彼弥陀法身浄土……、阿弥陀観自在王如来法身聖性浄土観。

741下、742上中下

② 『説林』巻五、cf. 矢吹表、藤田表No.233、ただし藤田表では726上削除、742上欠く。

③ 望月史論 pp. 519～531

④ 本経には二つの問題がある。第一は望月博士の指摘した偽疑経の正否、第二は藤田博士が否定した最初の思想である。

望月博士は、高麗本の不空訳、『続貞元録』の金剛智訳（大正55・1049下）、経序の相互間の年代的矛盾、註疏風書体、『梵網経』の影響を挙げて唐末期頃の製作とされる。

藤田博士が否定された記述について、継成は「私云、此等経文、能合於無量寿経所説不生欲覚瞋覚害等之因行相」と註する。これは『無量寿経』巻下〈三毒煩悩〉（大正12・274以下）と相応させているわけであるが必ずしも一致しているわけでは無い。望月博士は〝第四の左字観を浄土門と名けたのは、弥陀即ち観自在王は西方浄土を以て表示せられるからであり（前掲書 p. 521）〟と当該文を浄土思想と自明のことにされている。本経所説の「根本秘密総有五門」は密教五仏の配置であり、ここでは阿弥陀仏に代えて観自在王如来が挙げられているが浄土思想と見做されたと考えて良いであろう。

観世音不空羂索王心神咒功徳法門名不空成就法

観世音不空羂索王神咒見仏成験法第十六

……、若有受持読誦解説、或以香花塗○傘蓋幢幡恭敬供養、是人臨終終時、必定往生極楽界阿弥陀仏国、寿命無量相一等、如我大悲観世音菩薩。

S. 232

cf. Giles. No. 5161 (Other uncanonical sūtras)

関係真経『不空羂索陀羅尼経』李無諂訳（大正20・419中）

若有受持読誦此呪、以華散香焼香塗香華鬘幢蓋幡等、供養恭敬尊重讃歎之者、彼当得生極楽世界無量寿仏刹、寿命無量等同得共世尊観自在菩薩見如来（成就）品第十六竟、

『不空羂索陀羅尼自在王呪経』宝思惟訳（大正20・432上）

北方大聖毗沙門天王経

（東方……薬師如来……）、南無西方阿弥陀如来補処観音菩薩大勢至菩薩、（南無上方広求如来……）

阿弥陀仏往生浄土真言

唵阿弥陀婆耶……南無阿弥陀穩遮耶

S. 5560

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

cf. Giles. No. 5172 (Other uncanonical sūtras)

類似の経名たる『北方毘沙門多宝蔵天王神妙陀羅尼別行儀軌』不空訳、『北方毘沙門天王随軍護法儀軌』不空訳、『北方毘沙門天王随軍護法真言』不空訳にはいずれも認められない。

大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼神咒経

普光如来正真等覚世尊、敬礼阿弥陀如来正真等覚世尊、……

従此命終極楽国

S. 4637

cf. Giles. No. 5181A (Other canonical sūtras)

関係真経『毘倶胝菩薩一百八名経』宋法天訳（大正20・502上）

従此命終、往生西方極楽世界（？）

消災除横潅頂延命真言経

世世応当生極楽

S. 2037、2095

cf. Giles. No. 5346、5347 (Apocryphal Sūtra)

大正蔵未収経

相好経

三称南無阿弥陀仏（細字）

S. 22、4678

cf. Giles. No. 5341、5342 (Apocryphal Sūtras)

大正蔵未収経

なお、同名経 S. 2461、2686細字は「三念仏」

第二項　古 佚 経

善王皇帝尊経

其有人、学道念欲往生西方阿弥陀仏国者、憶念昼夜一日若二日或三日若四日若五日至六日七日、若復於中欲還悔者、聞我説是善王功徳、命欲尽時、有八菩薩、皆悉飛来迎取此人、到西方阿弥陀仏国中、終不得止。

『安楽集』巻下（大正47・20中）

① 出5、法2、歴13（世注為疑）、仁4、内10、武15、開18、貞28

③ 望月仏教史 pp. 120～121、牧田論文 pp. 344～345

④ 牧田博士は当該全文を挙げて、羅什訳『阿弥陀仏』の影響を指摘されるが、むしろ『潅頂抜除過罪生死得度経』に相似している。

惟務三昧経

如惟務三昧経云、有兄弟二人、兄信因果、弟無信心而能善解相法、因其鏡中自見面上死相已現不過七日、時有智者教往問仏。仏時報言、七日不虚、若能一心念仏修戒、或得度難、尋即依教繫念時至六日、即有二鬼来、耳聞其念仏之声、竟無能前進、還告閻羅王、閻羅王索符、已注云、由持戒念仏功徳生第三炎天。

『安楽集』巻下（大正47・16上）

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

① 出5、法2、歴13、仁4、内10、武15、開18、貞28

② 『観念法門』(大正47・25下) 経名のみ。

③ 牧田論文 pp.343～345

④ 本経には〈阿弥陀仏、極楽〉の語は無いが、牧田博士の指摘の如く、『阿弥陀経』の影響を受け、念仏修戒の功徳が強調されているから、浄土経典と見做された古佚疑経に属するものである。

なお、『安楽集』当該文の後に『譬喩経』佚文の類似の思想を述べた引用がある。

目連所問経

仏告目連、譬如万川長流有浮草木、前不顧後、後不顧前、都会大海、世間亦爾。雖有豪貴富楽自在、悉不得免生老病死、只由不信仏経後世為人、更甚困劇、不能得生千仏国土、是故我説、無量寿仏国易往易取、而人不能修行往生、反事九十五種邪道、我説是人、名無眼人名無耳人。

『安楽集』巻上(大正47・14上)

① 目連(所)問経 出4、法3、歴14、仁3、静3、内10、武11、12、開5、15、18、貞8、25、28

(摩訶目連問経)法4、仁4、静4、武15、開18、貞28

② 『阿弥陀経疏』(基?)「又智度論引目連問経曰、仏言、如我釈迦牟尼有浄土穢土、我今西方阿弥陀仏一切如来亦爾、皆有浄穢、但以機縁有宜故致差異」(大正37・318下～319上)、但し『智度論』には相応文は認め難い。

『楽邦文類』巻一

『往生要集』巻上、『説林』巻七「私云、此文今蔵中所在目連所問経、不見之、当有異本別在、楽邦文類已標此標文、又祖師亦用此文意、則今不可漏却、故録之」、矢吹表「(縮刷)寒十、同経(『目連所問経』法天訳、大正24・911中以下)ニナシ」として挙げる。

④ 同名経典として『犯戒罪報軽重経』(『目連問経』)安世高訳、『目連所問経』法天訳、『目連問戒律中五百軽重事』五篇事品第1 失訳人名今附東晋録(いずれも大正24巻所収)が現存するが相応しないし、律部所収経典での浄土思想は極めて稀れなのであり(藤田表参照)、本経は全く異なった経典と思われる。

『安楽集』所引の文は、とくに「無量寿国 易往易取」の思想として『楽邦文類』で取挙げられ、日本浄土教では易行思想の典拠として重じられた。

『阿弥陀経疏』に云う「目連問経」の文が『安楽集』所引の経典と異なるならば、新たな〈古佚経〉ということになる。

また『念仏鏡末』に「准目連問経、破初篇戒、取長寿諸天計人間九百一十五倶胝六百万歳堕地獄」(大正47・160中)とあり、これは律部経典の取意引文であるが、『阿弥陀経疏』基撰(?)、『念仏鏡』の製作には問題があり(望月信亨『中国浄土教史』pp.198～200、294、岩井大慧『日支仏教史論改』p.156等参照)、本経についてはそうした問題を含めて別に論及したい。

善信磨祝経

仏在舎衛国、時有長者女、名曰善信……

爾時天神現於虚空、語善信言、若当帰西方安隠清浄法国、且当先向十方礼拝、慈心敬意念必達也。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

……

有天神於空中言、汝当正心向於西方、説此一頌、以是讃歎阿弥陀仏、善信即向西方、如神所勅、天地大動、……。出善信麿祝経巻上

『経律異相』巻三十八（大正53・205上～下）、

① （善信女経）出５、法４、歴９、14、仁４、静４、内３、10、武７、訳３、開18、貞28
（善信神呪経）法４、歴14、仁４、静４、武11、開18、貞28

② 『楽邦文類』巻一（大正47・160下～161上）「善信摩親経　善信厭女求生浄土」と挙げ、出典として『経律異相』の当該文を抄出する。
『説林』巻七には更にそれを承けて「私云、此経名今蔵中所無也」と細註する。

③ 望月仏教史 pp. 137、147

須弥四域経

須弥四域経云、天地初開之時、未有日月星辰、縦有天人来下、但用項光照用、爾時人民多生苦悩、於是阿弥陀仏遣二菩薩、一名宝応声二名宝吉祥、……此二菩薩共相籌議、向第七梵天上、取其七宝、来至此界、造日月星辰二十八宿、以照天下、定其四時春秋冬夏、時二菩薩共相謂言、所以日月星辰二十八宿西行者、一切諸天人民尽共稽首阿弥陀仏、是以日月星辰皆悉傾心向彼、

『安楽集』巻下（大正47・18中）

① 法２、仁４、内10、武15、開18、貞28

② 『安楽集』の諸註釈書の外に、『観念法門私記冠註』（『浄全』巻四、p. 279）、『観念法門私記巻下私鈔』〔加祐〕（『浄全』巻四、p. 334）、『往生礼讃私記見聞』（『浄全』巻四、p. 694）、『二蔵義見聞』巻七（『浄全』巻一二、p. 491）など。

③ 望月仏教史 p. 146、牧田論文 p. 344

④ 『安楽集』所引故に、古佚の疑経であるが日本浄土典籍に引用が多い。中でも加祐は「是雖偽経、其所説不違仏教故、引用之」と釈している。以って疑経典に対する態度が窺える。

須弥像図山経

依須弥像図山経及十二遊経、竝云、成劫已過、入住劫来経七小劫也……、遂失光明、人民呼嗟、爾時西方阿弥陀仏告宝応声宝吉祥等二大菩薩、汝可往彼与造日月、開其眼目造作法度、宝応声者示為伏羲、宝吉祥者化為女媧、後現命尽還帰西方。

『弁正論』巻五（大正52・521中）

① 武15、開18、貞28

③ 望月仏教史 p. 146

十二遊経

※須弥像図山経と同じ。

『弁正論』巻五（大正52・521中）

③ 第二章第一節第一項 p.102参照。

空行三昧経

弥陀仏先我四劫得道、維衛仏先我三劫得道。

『法苑珠林』巻十一（大正53・369下）

① 無し。但し類似の経名として、

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

『定行三昧経』出5、法2、歴13、14、仁4、内10、武15、開18、貞28

『空浄三昧経』出4、法2、歴4、10、仁4、内1、4、訳1、3、開1、5、18、貞1、8、28

④ 本経は経録に無く、類似の経典も現存しない。『法苑珠林』「成道部」当該文前後の経典(『普曜経』『自誓三昧経』『善見津』など)より、釈迦成道の年令に関説して挙げられたと思われる。

優填王作仏形像経

若当有人作仏形像、……、後皆得生無量寿国、作大菩薩最尊第一

『諸経要集』巻八(大正54・76中)

『法苑珠林』巻三十三(大正53・540下)

cf. 異本

『作仏形像経』(大正16・788下)、藤田表No.4 寿終皆生阿弥陀仏国

『造立形像福報経』(大正16・790上)、藤田表No.61 後皆往生阿弥陀仏国、作大菩薩最尊第一

① 作仏形像経(優填王作仏形像経、作仏因縁経)出4、法3、歴4、14、仁1、静1、武11、13、14、開1、貞2

造立形像福報経 法3、歴14、仁1、静1、武5、13、開3、貞5

② 『往生要集』巻下(『浄土宗全書』巻一五p.118 加文)

作仏形像、功徳無量、世世所生、不堕悪道、後皆得生無量寿国、作大菩提、当得成仏、云々略抄。

③ 望月仏教史 p.130

④ 本経の記述を古佚経と見るか、『作仏形像経』の一写し違いと見るかは問題がある。

経録に依れば現存異本は二部であり、『優填王作仏形像経』は『作仏形像経』の別名であり、他に闕本経等の記録は無い。しかし、当該文を現存二部と比較すると、阿弥陀仏名は異なり、その後の「作大菩薩最尊第一」の語は『造立形像福報経』に相応する。現存二部は広略の相違、頌文の有無があるが良く相応し、当該文は『造立形像福報経』の要略出に近い。ここでは現存『作仏形像経』と異なる故に古佚経として扱う。

弥勒所問経

如弥勒発問経言、爾時弥勒菩薩白言、如仏所説阿弥陀仏功徳利益、若能十念相続不断念彼仏者、即得往生、当云何念、仏言、非凡夫念、非不善念、非雑結使念、具足如是念、即得往生安楽国土、有凡十念、何等為十。

一者、於一切衆生常生慈心、於一切衆生不毀其行、若毀其行、終不往生。

二者、於一切衆生深起悲心、除残害意。

三者、発護法心、不惜身命、於一切法、不生誹謗。

四者、於忍辱中生決定心。

五者、深心清浄、不深利養。

六者、発一切種智心、日日常念、無有廃忘。

七者、於一切衆生起尊重心、除我慢意、謙下言説。

八者、於世談語、不生味著心。

九者、近於覚意、深起種種善根因縁、遠離憒擾散乱之心。

十者、正念観仏、除去諸疑。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

『遊心安楽道』元暁撰（大正47・114下）

cf.『両巻無量寿宗要経』元暁撰（大正37・129上）※安楽→安養、有凡→凡有、不深→不染、慣擾→慣鬧、諸疑→諸想。

異　本

『発覚浄心経』闍那崛多訳（大正12・51下～52上）、藤田表No.105

「発勝志楽会」菩提流志訳（『大宝積経』巻九二、大正11・528中下）、藤田表No.174

② 『華厳孔目章』巻四　智儼（大正45・582下）、『浄土論』巻中　迦才、『釈浄土群疑論』巻五、『西方要決』基（？）、元暁　前掲書、法位・玄一・璟興・義寂（『念仏本願義』長西所引、『浄全』巻八、pp.451～453）

『往生要集』巻下、『念仏本願義』等。

③ 望月信亨「十念論」（『浄土教之研究』）、源弘之「新羅浄土教の特色」（『新羅仏教研究』）

④ 当該文は『無量寿経』十念思想の関係において論義される個所であるが、ここでは浄土思想（阿弥陀仏、安楽国土）の言及が比較的多い元暁の引文を挙げた。

就中、『釈浄土群疑論』の引文（大正47・61上中）には、十念の区切り、数個の用語に違いがある。

源弘之氏は新羅浄土教の特色として本経〈十念〉思想の系譜を考察された後に〝教学的にも弥勒と弥陀の関係は矛盾することなく理論化され独自な十念論、浄土論を生み出すに至った。〟と指摘される。他の仏・菩薩と兼ねて信仰されることは疑経典の浄土思想の形態でも一つの特徴として言えることである。※思想形態については次号で論及したい。

第三項　経録に依る疑経典

舎利弗生西方経

生西方斎経

① 闕本経　　武12、開15、貞25

失訳経　出4、　　開5、貞8

④ 経名からの推定である。本来一経であったのをすべての経録を網羅した開元録が二経にしたと思われる。

第四項　浄土経典と見做された疑経典

浄度三昧経

巻第一

聞如是……

卍続1・87・4

cf. 巻上（S.4546）

巻中

S.5960

巻下

……意耳、為仏弟子……、……、莫不歓喜、作礼而去。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

S.2301

cf. 牧田諦亮「浄度三昧経とその燉煌本」附載(『仏教大学研究紀要』第37号)。

① 出4、5、法2、歴9、10、仁4、5、静5、内4、10、訳3、武5、13、開5、6、14、18、20、貞7、9、24、28

奈良朝 No.1764

『長西録』『経籍録』

② 『安楽集』巻下「浄度菩薩経」、『観念法門』、『万善同帰集』など。

③ 常盤大定『後漢より宋斉に至る訳経総録』pp.268、318etc., 矢吹慶輝『三階教之研究』pp.596etc., 望月史論 pp.404～408、牧田諦亮「浄度三昧経とその敦煌本」(『仏教大学研究紀要』第37号)。

④ 本経は厳密な意味では浄土思想に言及していないと思われる。ただ『安楽集』『観念法門』に取挙げられていることにより、末疏には多数引証されている。ここでは『観念法門私記』巻下良忠(『浄土宗全書』巻四 p.258)。

問、浄土三昧経中、全不説弥陀極楽行相、何為依経

答、彼経雖不説浄土而説受持斎戒者得善神護念之相、故引而為護念増上縁也。

の解釈に準拠して扱う。

なお、本経については経録・訳者、思想等の問題について考証すべき点が多いが、すでに諸論考が認められるし、ここでは浄土教に関係する点のみを挙げた。

占察善悪業報経　菩提登訳

若人欲生他方現在浄国者、応当随彼世界仏之名字、専意誦念一心不乱、如上観察者、決定得生彼仏浄国。

大正17・908下～909上

① 法2、歴12、仁4、内5、10、武13、開7、貞10

奈良朝 No.168

② 『浄土論』巻下、『釈浄土群疑論』巻五、七、『阿弥陀経疏』基(?)、『阿弥陀経義疏聞持記』戒度。

『往生要集』巻下、その他多数。

③ 望月発達 pp.222～229、望月史論 pp.485～493、望月信亨『大乗起信論之研究』pp.173～200

預修十王生七経　(閻羅王授記合四衆逆修生七斎功徳往生浄土経、十王生七経)

謹啓諷閻羅王預修生七往生浄土経　誓勧有縁　以五会啓経入讃　念阿弥陀仏

成都府大聖慈寺沙門蔵川述

仏説閻羅王……

卍続2乙・23・4

cf. 小川貫弌「十王七生経讃図巻の構造」(『仏教文化史研究』pp.85～96)。

③ 故秃氏祐祥・小川貫弌「十王七生経讃図巻の構造」(『西域文化研究』第一所収、小川貫弌『仏教文化史研究』pp.80～154)。

④ 写本数その他の問題については小川貫弌教授前掲書に論及されているので、ここでは挙げない。小川教授は〝蔵川が……経文のあいだに七言の偈讃を添入し、あと阿弥陀仏の名を念じて

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

浄土を願生する儀式経典としたことは、まことに適切な処置であった。（『仏教文化史研究』p.110）と説明される。

守護国界経

命終善悪　感報優劣

仏言、若人命終之時、預知時至、正念分明、洗浴著衣、吉祥而逝、光明照身、見仏相好、衆善俱現、定知、此人決定往生浄土、若人念仏持戒……、此人疑情未断、生於疑戒、……

『楽邦文類』巻一（大正47・161上）

② 『蓮宗宝鑑』巻八

『説林』巻七

③ 第二章第一節第二項 p.106

④ 阿弥陀仏、極楽に言及されない浄土経典と見做された古佚経である。

第三節　日本撰述浄土教関係疑経典

観世音菩薩往生本縁経　（往生浄土本縁経、浄土本縁経）　失訳人今附西晋録

仏告総持自在菩薩、善哉善哉、汝等諦聴、従此西方過二十恒河沙仏土、有世界名曰極楽、其土衆生無有衆苦、但受諸楽、其国有仏号阿弥陀、三乗聖衆充満、其中有一生補処大士、名観世音自在、久植善根、成就大悲行願、今来此土、為欲顕示往生浄土本末因縁、……

時観世音告総持自在言、乃往過去不可説阿僧祇劫前、……有一梵士名曰長那……、……有妻名摩那斯羅……、梵士得二子…兄号早離弟名速離……

爾時梵士長那者今釈迦牟尼如来是也、母摩那斯羅者西方阿弥陀如来是也、兄早離者我身是也、弟速離者大勢至菩薩是也、朋友者総持自在菩薩是也、……

……

卍続1・87・4

① 『長西録』『経籍録』

② 『円光大師行状書図翼讃』巻23　円智義山（『浄全』巻一六、p.365）に、

浄土本縁経　是偽経智昇目録ニ入レタリト天台十疑論道綽安楽集善導観念法門等ノ古師皆引用セラレタリ

とあるが疑わしい。

『大経直談要註記』巻22　聖総（『浄全』巻一三、p.264）には「不知撰」と不明にしている。

④ 観世音菩薩の本生説話。

九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経　唐不空

無量寿国有九品浄誡三摩地、是即諸仏境界如来所居、……其九品境界、上品上生真色地、上品中生無垢地、……、下品下生楽門地、是名曰九品浄誡真如境、

是中坐十二大曼陀羅大円鏡智宝像、其名曰一切三達無量光仏、…無辺光仏、…無礙光仏、……、…超日月光仏、如是諸仏如来是真色具足……

若有衆生欲往生如是九品浄土、奉覲十二円如来、日夜三時称如是九品浄土名、讃十二光仏号……

竜谷大学図書館蔵（牧田諦亮「松誉巌的の疑経観」附載、『惠谷先生古稀記念浄土教の思想と文化』所収）

cf. 大正19・79中～80上、㊊長谷寺蔵本。

① 『長西録』『経籍録』

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

② 『論註拾遺抄』了慧、『選択決疑抄』良栄、『摧邪興正集』実恵。

③ 望月史論p.354、牧田諦亮 前掲論文。

④ 竜谷本と大正蔵本には87年の差があり、後者には阿弥陀如来根本大呪真言とその後文が欠け、数個所用語に相違が認められる。大呪の欠除については大正蔵本後書に『阿弥陀大心抄』『(十)住心論愚草』を出して指摘されている。

内容は『観無量寿経』〈九品〉を浄土に配し、『無量寿経』〈十二光仏〉を別仏として当て、その称讃と阿弥陀真言の読誦を勧めている。

無量寿如来至真等正覚経 東晋法力

如是我聞……

仏告文殊菩薩、……、過去久遠劫昔有珊提嵐国、其国主号無上念王、有一千子、不瞬・摩尼・王衆・泯圖等、是今名観音・勢至・文殊・普賢等……

同時世自在王仏出世、彼念王捨国王位、師世自在王仏、剃髪号法蔵比丘、勤五劫思惟惟兆載永劫苦行、初冬十五夜暁天明星一見、端的成等正覚、号無量寿如来、故西方去此不遠、構仏土、名安楽世界、仏亦号阿弥陀、其巳来於今十劫、彼世尊阿弥陀如来、本行菩薩道時、発四十八願、令所求皆得、一一四十八願功徳、如説広本、……、此故六方恒沙諸仏証誠念仏是、加之高声念仏十種有功徳、一能除睡眠、二天魔驚怖、……、九三昧現前、十定生極楽、……、皆大歓喜、信受奉行。

牧田諦亮「松誉巌的の疑経観」附載(『惠谷先生古稀記念浄土教の思想と文化』)

①『長西録』(無量寿経?)、『経籍録』

③ 牧田諦亮 前掲論文

④ 本経は、〈浄土三部経〉、『悲華経』の〈本生説話(大正3・174下～192中)〉、『阿弥陀経通賛疏』の〈高声念仏十種功徳(大正37・341下)〉を依用して構成されている。〈無量寿経〉五存七闕の同名闕本経に仮託した疑経典である。

無量寿仏名号利益大事因縁経 曹魏唐僧鎧

我聞如是、……

……彼法蔵比丘今巳成正覚、現在西方清浄安楽刹、号曰不可思議光無量寿如来……

卍続1・1・4

③ 望月史論 p.358

④ 法蔵菩薩の因縁、無量寿仏の名号利益を説く本経について、望月博士は「彼久遠実成法身常住無量寿仏者豈異人耶、今日世尊我身是也、」等の記述より、〝叡山覚運等の説を承けた〟とされる。

阿弥陀仏根本秘密神呪経 曹魏菩提流支

如是我聞……

卍続1・3・5

① 『経籍録』

② 「神呪経真偽決疑」寂誉(元禄十一年)

③ 望月史論 p.354

④ 『阿弥陀経』の中間に『抜一切業障根本得生極楽浄土神呪』と阿弥陀三字の無量の功徳を挿入したもの。寂誉は本経附載の前掲文で疑難五を挙げ、会釈四で通じている。望月博士は〝阿弥陀の三字を仏法僧に配当したのは叡山等で起った〟と指摘される。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

阿弥陀三昧海経　宋元嘉中畺良耶舎

如是我聞……、爾時世尊釈迦牟尼仏告大衆言、我為汝等、欲説阿弥陀三昧海広大無辺不可思議…三千大千世界悉弥陀三昧海也。……

牧田諦亮「松誉巌的の疑経観」附載（『恵谷先生古稀記念 浄土教の思想と文化』）

① 『経籍録』

③ 牧田諦亮　前掲論文

④ 「三千大千世界悉弥陀三昧海也」という書出しから、阿弥陀仏への念仏の諸功徳を述べる。松誉の出所縁起には〈安土宗論〉の論拠と記す。

地蔵菩薩発心因縁十王経（発心因縁十王経、地蔵十王経）

成都麻（？＝府）大聖慈恩寺沙門蔵川述

十五日至心進念阿弥陀仏

第九都市王庁阿閦如来、

……、於諸仏中造阿弥陀仏、光明遍照除熱寒苦、

第十五道転輪王庁阿弥陀仏

卍続２乙・23・４

cf.『預修十王七経』の項

① 『真宗教典志』巻一（『大日本仏教全書』一 p.445）に「傍依経論」十部の一として挙げ、考証する。

③ 岩佐貫三「十王経思想の系統と日本的摂取」（『印仏研』第12巻第１号）

④ 『預修十王七生経』〈十王思想〉の讃偈をもとにして、平安朝末から改訂されて流行し、後に中陰年忌の典拠となる。本経に認められる浄土思想は敦煌文献の斎戒文（たとえば『大乗四斎日』大正85・1299下、『地蔵菩薩十斎日』大正85・1300上など）と密接な関係を有している。『預修十王生七経』の中にはこうした浄土思想は明記されていないだけに相互関係の検討は流布・変遷に一つの手掛りを与えるものと思われる。この点については別に讃文・祈祷文を検討する際に論考したい。

妙法蓮華三昧秘密三摩耶経　不空訳

蓮華部主弥陀

（妙法蓮華方便秘密三摩耶品）

第一相葉東方阿閦

第二性葉南方宝生

第三體葉西方弥陀

第四力葉北方不空

第五作葉東南普賢

⋮

卍続１・３・５

② 『講演法華儀』巻上、『教時義』、『菩提心義抄』、『真如観』、『法華玄義私記』等。

③ 望月史論 p.358、田村芳朗「本覚思想に対する批判論」（『印仏研』第21巻第２号）。

④ 経名より、『法華経』を密教思想で理解した経典であることが判るが、経初の「帰命本覚心法

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

身、常住妙法心蓮台……」の偈文は本覚思想の典拠としてしばしば引用された（田村芳朗前掲論文)。当該浄土思想は、『法華経』方便品〈十如是〉(大正８・５下）に密教の中台八葉の仏菩薩（※ただし仏は金剛界の五仏）を配した中での記述である。

馬鳴菩薩成就悉地念誦　不空訳 吉備大臣持来

由結印誦真言力故、滅除無量罪報厭眉呪咀悪鬼羅刹亡霊魑魅之毒害一切灾難、得無量福、現世有無量快楽、後生往生極楽、

卍続１・３・５

cf. 奥書有康和天仁大治保延年号蠹損文字不分明故略之

文化甲子七月二十七日　慈順

④　不分明奥書の年号によれば平安時代には成立していたことになる。

大梵天王問仏決疑経　一巻

月輪品第三

東方阿閦仏　南方宝生仏　西方阿弥陀　北方不空成　如是等無量　恒河沙諸仏　称常念名号　恭敬礼供養

往生品第七

白仏言、世尊四十余年所説経中、常説応念応称仏名、如薬師仏阿弥陀仏、以心相念、以相舌称、得何功徳……

即解彼仏阿弥陀及我釈迦仏…、若有開悟五大智者、即得化生、阿弥陀仏大菩薩衆囲繞住所宝座之上……

阿弥陀仏、以本願力……

或有菩薩、唯称名号、一向専念無量寿仏、一心不乱、…往生極楽下品蓮華胎生之中…、

白仏言、世尊、如阿弥陀本願言者除五逆生及謗法生、亦如下品下生人者謗法五逆皆得往生、云何如是有差別也、仏言……

卍続１・87・４

③　忽滑谷快天『禅学思想史』上、pp. 294～298

④　本経二巻本については忽滑谷博士前掲書で論考されるが、一巻本には触れていない（ただし、同博士『禅学批判論附録』未見)。浄土思想について云えば、往生品第七全体に渉って認められ、「化生」「胎生」「九品往生」「本願力」「五逆謗法」等の記述には顕著に〈浄土三部経〉からの転用を示している。

因果得道経

釈迦如来後末世善導出世、可導悪人、従胎内有善導二字、一者釈迦如来迹、二者弥陀如来迹

『浄土宗要集』第一見聞第一　良栄述（『浄全』巻十一、p. 222)

③　牧田諦亮「松誉巌的の疑経観」（『恵谷先生古稀記念 浄土教の思想と文化』)

④　善導の影響は中国ではそれ程大きくは無く（高雄義堅『中国仏教史論』pp. 162～163）法然以降と思われる。

牧田諦亮　前掲論文では、他に『菴羅女経』(『釈観無量寿仏経記』法聡、『浄全』巻五、p. 230) を指摘されるが、浄土思想に言及していないので挙げない。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

浄土阿弥陀経

① 『長西録』『経籍録』

② 『小経直談要註記』巻三（『浄全』巻一三、p.339）

経云去此十万億刹 小経並称讃諸仏功徳経 浄土阿弥陀経等全同

③ 守屋孝蔵氏『古経図録』150、解説（p.35）に「〈鎌倉時代〉浄土教経典の仏説阿弥陀経とは異り、おそらく偽経であろう。」とあるが内容には触れていない（未見）。

長西録、経籍録に云う本経が、『直談要註記』にいう阿弥陀経の異本か、『古経図録』の偽経かは確かめえないので、経録に依る疑経典の範疇に含めておく。

四十八願阿弥陀経　阿地瞿多

① 『長西録』『経籍録』

無量寿〔経〕浄土阿弥陀経

① 『長西録』

要　　結

以上、今日予想されうる浄土教に関係する広義の疑経典について、浄土教に関係する事項を中心に考証した。もとより本稿で扱った関係資料に限ってみても、検索を続ければ更に多くの経典が見出されるであろうし、また本稿で取挙げた中にも筆者の誤解に依る経典も考えられよう。しかしながら、そうした難点については更に推敲を続け、後日補正することにして、本稿では以上の経典に限り論考を進めることにしたい。

そこで各節毎の要略であるが、初めの浄土思想と見做された真経については、すでに藤田宏達博士によって指摘された290部の関係資料との関連等、なお検討すべき問題は残されているが、中国浄土教における関係経典としては訳語の類似から依用された経典を考慮せねばならない点、また単に阿弥陀仏、極楽等の記述のみではなく極楽往生、阿弥陀仏への念仏等の思想に関係する他方往生、他仏への念仏等の経典も重要な浄土教関係経典と認められる点が容認されればよいわけである。もとよりこの点を拡大解釈すれば所謂〈八万四千の法門〉すべてが関係してくるのであり、各浄土教家の引証経典の研究分野に渉る問題となり、本稿の意図と離れてしまうが、浄土教関係経典の研究が多様に発展した中国浄土教の解明を意図して続ければ、必然的にこうした方向に向うことが示唆されよう。

次に、本稿の意図した主要経典たる中国・日本撰述浄土疑経典であるが、すでにみてきたように明らかな偽経、真偽未詳の疑経典、浄土思想に限っては附加、挿入の経典、逆に浄土思想に関しては通常認められる内容であっても経典に問題を残す経典……、更に浄土思想を中心に構成された疑経典、極く一部にしか認められないもの、浄土思想は認められても全体が判らない古佚経、経録にしか認められない疑経典……と実に多種多様な経典が指摘される。そしてそれらに成立・写経年代、思想形態、流布変遷等の諸点を勘案し、整理すれば、そこには浄土教関係疑経典を通して新たな浄土教における諸相がおのずから示されているように思える。

次号〈研究篇〉においてはそうした問題について論考することにしたい。

追記　本号においては、本章の分類に関係して〔一覧表〕、〈大正蔵経〉〈続蔵経〉〈敦煌文献〉、その他の出典別分類の特徴、新たに経名の判明した敦煌写本、浄土思想とまぎらわしい或いは浄土教批判

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

経典等の資料に関係する諸点について触れる予定であったが、予定紙数をはるかに超えてしまい、次号で指摘することにする。

NII-Electronic Library Service